

煙の間からみえる黄色の蜜柑
照り返す日の光

かうして記述順序の指導を行ひ、それをもとにしてだんぐと書き廣げて行つて一つの文章にまとめさせる。時には文を書くのも共同でなす場合もある。そして次のやうな文が出来上るのである。

○池のほとり

真綿のやうな雲が南に流れて、薄絹のやうに消えてしまふ。学校の屋根の上のあたりに霧が二三羽しきりさ輪を描いてゐる。枯れた芝生には銀杏の落葉がサラサラと音を立ててころがる。池に渡した板橋の上には菖蒲の切株が薄黒くなつてゐる。池の水はカラカラに乾て處々に水溜りが出来てゐる。足跡でへこんだ處に鮎の子が二匹取残されて身動きもしない。岸のあたりには柳や白楊の落葉が散り敷いて風に吹かれて踊つてゐる。

向岸の萩の切株には赤い蜻蛉が一びき留つてゐる。築山の櫻はもう大分葉が散つてしまつて、たゞ二三枚黒疵の多い葉を残してゐる。「吉野櫻」と書いた小さな札がカラ／＼と音をさせて動いてゐる。櫻の木の下には白い枇杷の花が淋しそうに咲いてゐる。

築山のうしろの蜜柑畑では印絆纏を着た園丁が掃きあつめた枯葉を焚いてゐる。白い煙が蜜柑畑を包み小松

の林を包みだんぐと立ちのぼつて白楊の梢のあたりにきえて行く。畑の間から黄いろい蜜柑が二つ三つほのみえる。ふと温室の屋根の方を振向くと斜めに照りかへす日の光がキラ／＼と目を射つた。

出来上つた文を見ると、一寸手際よく出来てゐる。しかしこの文に兒童の生命が滲み出してゐると云へようか。何か知らぬはれた所があるやうに思はれる。つまり指導が干渉にまで進んで、兒童本然の生命を萎縮させた結果に外ならぬのである。

で、この例によつて指導と干渉との限界の線について考察して見よう。

初めに行はれた「池のほとり」の観察は先づ大體あれでよからうと思ふ。つまり池のほとりの醸す気分の中にひたつて、その個々のものゝ中につながつてゐる生命を見いだすことは大へん必要なことと思ふ。それで私の考ふる所では、こゝまでの指導であつたならば、餘り細かく互らない限り、行つてもいゝと思ふのであるが、しかしこれから先きに行はれてゐる指導は全部指導でなくして干渉になつてゐるのである。クローチエは「直観即表現である」とさへ云つてゐる。之れほど直観と表現の間には密

接な細かな関係があるのに、その間に立入つて、その文材に對して取捨を行ひ、加除を施すとは何と云ふ無謀な指導であらう。干渉でなくして何であらう！、生命の冒瀆でなくして何であらう！ 想と表現との間に直接的に教師の働きの入ることは恐しい干渉だ。

かうした科學的製作法を呪ふて最近に生れた某氏著綴方教授法に於て、私は又矢張り科學的製作法の用ひられてゐるのを發見せずには居られなかつた。先づこの著者は科學的に記述的態度を分類してゐる。曰く他物に對する主觀的態度の記述。曰く自己に對する客觀的態度の記述、曰く、曰く何、曰く何、……かく決定分類された記述態度は適當な割合を以て、各學年に配當せられ指導が行はれる。例へば「他物に對する主觀的態度」——擬人法の指導をする場合を考へる。この場合擬人法といふ記述的態度が先づ第一に決定せられてゐる。そしてそれを第一に兒童に詰込んで居つて記述に

かゝるのである。で嫌でも何でも兒童は擬人的態度の記述をなさねばならないのである。これでは本當の生命ある作品の出来る筈はないのである。凡そ記述の態度は、その人に胚胎した思想の特質と、その思想のデリケートな動き方によつて初めて決定せられるものである。で思想の胚胎があつて、初めて記述の態度を自然に生み出すのである。然るに記述態度を初めに決定して、その思想をその型の中に詰め込まうとしてゐるのである。潑瀾たる兒童の生命も、この狭苦しい型の中にはいつては窒息しないわけには行かぬのである。何と云ふ呪ふべき外部主義の教育方法であらう。然らば眞の指導とはいかなるものであらうか。一言にしてこれを云へば、思想を培ひ豊かにすることである。

一たい兒童は思想の萌芽はもつてゐる。しかしそれは培はなければ伸ばない。兒童の内から生れ出るものだけに依つて綴らせるといふことであるならば、兒童の魂を本當に發達をさせることをせず、兒童の心を偏狭なものになし易いのである。それは兒

童が自分のもつてゐる狭い貧しいものに頼り過ぎて、その他のものを見ることをしないやうになるからだと思はれる。それでどうしてもその狭い思想を廣く、貧しいものを豊かに指導する所がなくてはならない。これ指導教材の選定の必要が起り指導的學習の起る所以である。

指導の要點に就ては、教材論の所で大略述べて置いたから、こゝで再度説述する煩をさげたいと思ふ。依つて讀者はもう一遍あの教材論の中の「基本的指導教材の内容」及び「附帶的指導教材の内容」について讀んでいただきたい。さうすれば私が如何なる心持でこの指導を行はうとしてゐるか、明瞭するであらうと思ふから。どうかこゝまでお讀み下さつた方はもう一度頁を前へもどして御一讀下さい。

然らば、かうした指導はいかなる方法で行つたらよいのであらうか。

私は範文を提供することを以てその指導方法の主體としてゐるのである。ではばらく模範文の價值其他に就て考察して見たい。

カークパトリック氏著「フアンダメンタル・オブ・チャイルド・スタディ兒童研究の原理」の一項「デア・エロプメント・オブ・ア・グッド・フライン・スタンケット適應本能の發達」の中に次のやうな言葉が載せられてゐる。

兒童を教ふるに見させることによつてしたならば、單に説明によつてするよりも半分以上の時間を省略することが出来る。この事實は單に手工マニヤルなどの如き手先の技術のみに限らず、ピュアライインテリクチュアル・プロセス純然たる智的作用に關しても同様な眞理ツルリスである。

この語は頗る簡單であるけれども、模範の教育的價值を遺憾なく云ひ表はしたものである。道徳的方面に於ては、古くからこの模範といふことが特に重く見られて來てゐたのであるが、キーン・イン・テリクチュアル・マニヤル最近兒童心理の研究が進められ、模倣といふことが兒童期に於て、頗る盛なものであることが認められるやうになり、教育全般に互つて、更に重要な位置を占めるやうになつたのである。されば何れの教科でも積極的に適用したならば、頗る優良な結果を得ることが出来る。けれどもその中特によりよき効果を表はすものは、矢張り手工、圖書、體操、唱歌、綴方の如き教科に於てゝあらう。就中綴方はそ

れ等の教科の中でも一ばん能動的であり、且人間の複雑な思想生命を取扱ふものであるから、それだけ説明に困難が多く、随つて模範的實例を親しく兒童に示して、指導することが肝要である。綴方教授に於て模範文を提供することは、兒童の本性から考へても、教科の性質から考へても、頗る重要なこと、云はねばならぬ。

然るに近時自由教育の叫び、個性尊重の叫びが高くなるにつれて、この範文指導が一部の論者によつて非難せられてゐるのは甚だ遺憾である。この論者の云ふ所は、

第一 範文指導は模倣を強ひる傾向があるから、自然にその創作力を枯らして、模倣のみに巧みな人間を出來すといふのである。

成程これは範文指導に於て陥り易い點をよく云ひ表はしてゐる。然しよく考へて見ると、この言葉は綴方教授を餘りにせまいものに考へて居るための謬見から生れたものである。且又取扱の拙劣から來る弊害を、そのまゝ、範文そのものに責を負はせようとしてゐる謬想から生れたものである。若し綴方教授が何れの時間に於ても、範文を

示して之れを模倣せよと強ひるのであつたならば、創作力はしせんに枯らされてしまふかも知れない。しかしながら凡そ何れの教科でも、模倣と創作の二面があつて、常にこの取扱が行はれてゐる以上、この論者の云ふやうな虞れはない筈である。範文指導はたゞ兒童の模倣力、理解力を利用して創作力を陶冶せんとする時にのみ用ひるのであるから、何等の危険もないのである。のみならずこの場合には大に兒童の心力を啓培するものである。尙又模倣といつても、多くの場合純粹な模倣といふものはなり立つものではない。兒童の心の中を一度通過するならば、何れの點かその人の個性に着色されて居るのである。この點から考へても範文が模倣のみを教へるものと云ふことは出來ないと思ふのである。

第二には、教師がその兒童の思想感情に生き得ざる限り、範文によりて眞の模範を示すことは不可能である。範文を多く示すことは却つて兒童の個性を虐げることになる——とかう云ふのである。

然しこれは兒童に綴方の本質が十分打ち込まれてゐるならば、かゝる云ひ分は意味のないことになつてしまふ。範文はその目的が、その時、その場に依つていろく違ふのであるけれども、教師の人格とその文章との間に繋がつてゐる密接なる交渉を、兒童が汲みとることが出来れば、それで範文の提供の目的の大部分は達し得られたものである。何も教師が兒童になりかはつて文を綴る必要はない。「これは私の文である。」と云つて範文を示すところに價值があるのである。で「文は人なり」の眞意が兒童に徹して居り、教師の個性がその範文の上に表はれて居るのであつたならば、その範文の目的は充分に達し得られるのである。

私は曾て「野菜の芽」「新米」の二篇を、稍程度の高いものであるといふことを知りながら、尋五の兒童に示したのであつた。それでも彼等は私の文意を可なりよく理解してくれたやうであつた。その作者が兒童の日常近接してゐる人であつたら兒童は可成り深い所まで理解して行くやうである。「野菜の芽」は私が住宅の裏の畑地に、いろ

くな野菜を播いて、その芽が美しく大きくなつていくこと、それを私が細かな注意の下に育ぐんでゐる心持とを表したものであつた。それを讀んで聞かせると、兒童は興味をもつて聞いてゐたが、果してその次の作には、兒童各自の作つてゐる白菜に關するものが多かつた。

○白 菜

私は白菜の種子を、先生からわけていたゞいて大へんうれしうございました。その日の午後、學校から歸ると直ぐ前の田にまきました。お父さんが「地ごしらへをしてやらうか。」とおつしやいましたけれども「何事も一人でやつて見るのがよいのだ。」と校長先生からいつも聞いてゐるので地ごしらへも、うれをきることも、たれをまくことも、みんな一人でやりました。三日目の朝、芽われがして黄色いものが見えておましたが、その日のばん方には青い葉が出ておきました。私ははじめてまいた種がよくはえたので、大へんうれしうございました。お父さんは来て見て「あつくまいたな。」と云つて笑はれました。

私は生えてから、毎日朝晩きつと見にいきました。まいてから十日目には本葉の二枚目がちよつとかほなだしました。私はお父さんに聞いて問引いたり、土よせをしたりしてやりました。黒菜蟲もこがれも一匹もゐないでよく大きくなります。

私は黒い土の上に、もえ上るやうな緑の色を見るのが氣持がよいございます。私は朝ぼんこれを見ると氣がせい／＼します。

私はこれをりつげに作つて、十二月のひんびよう會に一等をとらうと思つてゐます。(尋五 井上)

私の「野菜の芽」(第六章「著者の小品」参照)と、この文とを比較して讀んで見て下さい。いかなる程度であの作品が理解せられ、そしていかにしてその作品が生れてゐるか、明らかに見られるであらう。これによつて程度はやゝ高くても、教師の作品であつたら、可成りよく理解せられるかと知られる。又これが單なる模倣でなくして、兒童の心から湧き上つたところの作であることも知られる。

しかし範文は教師の作品からのみとるべきものではない。兒童の作品の中には幾らも範文としての資格を備へたものを見いだすことが出来るのである。兒童から生れた範文は生活が類似してゐるだけに理解の度も深く價值も多い。

かう考へて來ると、この第二の非難も、範文の價值の上に何等の動搖をも來し得な

いものであることが分るのである。

以上は、兒童の個性尊重の聲に伴つて起つた、範文指導の非難を解き併せて範文の價值を力説したものであるが、余は更に教授の効率の上から範文指導の價值を考へたのである。

從來各科教授に於て、其教授力の不徹底の叫びを各所に於て聞くのであるが、私はこの原因はつまり教授の中に、教師の個性が充分現はれてゐないことに歸著すると思ふ。從來の教授は類型的であつたのである。教授の段階にたよりすぎたり、大家の説などに依付しすぎたために、教師自身の極めて高貴な個性が、何處かに隠蔽されてしまつたのである。個性が現れないと云ふことは、生命の現れないといふことである。教師の生命の働きが表れないと云ふことは、指導の効率の上らないことなのである。而して綴方教授に於て、教師の個性を生かす所以は、教師の作品を示すに越したことはない範文指導は教授の能率の上から云つてもたしかな基礎をもつてゐる。

かゝる見地から、私は範文をもつて綴方指導の中心点としてゐるのである。しかし
範文にも多少の短所はある。(この短所が同時に長所としても考へられるのであるが)
即ち或る微細な點に對して明瞭に指示するといふやうなことが出来かねるのである。
生命の流露のまゝを提供して、そこに何等かの暗示を與へるといつたやうな、總合的
指導には長所をもつてゐる代りに、微細な點を「こゝだ!」と云つた風に指示するこ
とが困難なのである。で、そこには文話の力を藉らなければならぬ。しかし文話は
説明し得る長所をもつてゐる代りに、あまりに露骨になり易く、下手をやると、兒童
の思想を却つて萎縮させてしまふやうなこともあるのである。だから文話をなす場合
は餘程その要點を考へなければならぬ。兎に角何れかの一方のみでは、とてもその指
導の眞の働らきを表はすことが出来ないのであるから、兩者を適當に併用するのが最
もいゝことゝなるのである。

次に、範文及び文話による指導の實際を述べて見よう。

理解を主とする指導

皆さん。偉大な人物を崇拜し、信仰することは、自己の生命を生長させるために、
大へん力となるものです。それで誰れもが屹度自分の信仰する人をもつてゐることが
大切です。二宮尊徳先生、豊臣秀吉、瀧鶴臺の妻……皆偉い人でせう。だがそんな古
の人でなくつても、偉い人は皆さんの近くにいくらもあります、人には屹度一所や二
所は偉い所があります。それだけを見とゞけて學ぶだけでも結構ですね。皆さんのお
父さん、お母さん、お祖父さん、お婆さん……そんな人にも屹度偉い人があるに違ひ
ないのです。昔の人でも、今の人でも、近くの人でも遠くの人でもよい。皆さんが
「この人ならば……」と思ふ人について調べて書いて下さい。

次に掲げるのは、昨年の生徒の或る人が書いたものです、参考のため一べん讀みま
せう。

○近藤文助

我が家の先祖は近藤文助と申します、初めて下前谷の疊屋の養子になつてゐたのですが、眼病をわづらひ、其の任に堪えずとて歸り、下屋敷に家を建て獨立しました。この時は僅に一文の錢もなかつたさうであります。それから妻には木綿織をさせ、自分は小商をなし、いかにもして家を興さんと勉めました。数年にして僅ながら貯金も出来たので、今の屋敷を買ひ賑を建てました。後新屋の隠居が賣れたのでそれを買ひとつて本宅としてたてました。これが今の我が家でありませう。それから更に勉勵して遂に土蔵一棟を建て、又田畑山林なども買ひとりました。

我等が安樂に暮すことの出来るのは全くこの人のおかげであります。我家のためには實に有難い先祖であります。

勿論立派といふ程の文ではありませんが、崇拜の心持はよく現はれてゐます。そこが尊いと思ひます。

で次の題は「私の尊ぶ人」といたします。次の時間までに考へて置いて下さい。

感動を主とする指導——童話の作り方

皆さんは螢をとるとき、何と云つて唄ひますか。

兒童「ほうたる來いやれ水やろ。あつちの水は苦いぞ、こつちの水は甘いぞ」

さうですね。私の地方でもさう云つて螢をとりますよ。私もこの謠を聞くと、幼い頃螢をとつた時のことが思はれます。大抵螢の出るのは、春蠶の三眠起きた頃です。このころになると白い小手毬の花も咲きます。そしてぼつ／＼螢が出初めるのです。螢が出ると、螢は私の好きな叔父さんに頼んで螢籠をこしらへて貰つたものです。その螢籠は古い柄杓のかわの底をめて、その兩側に白い紙を貼つてもらひ、それに絲をつけて提げることの出来るやうに出来てゐるのです。夕方になるとそれを提げて、晝間切つて置いた笹竹をもつて出て行つたものです。

私達は村下の水田のある所に行きました。そこには柿の若葉がこんもりと茂つてゐました。又名も知れない常葉の大木も二三本は生えてゐました。その小さな森の中から綺麗な泉が湧いてゐます。水田はこの泉に養はれてゐるのです。で螢はこの泉から水田にかけて澤山居ました。遠い水田の方で螢は幾匹も幾匹もびか／＼と光つて飛んでゐます。そこで私達は大聲をあげて唄つたものです。

螢来いやれ、水やろ。あつちの水は苦いぞ。こつちの水はあアまいぞ！。

何遍も何遍も繰り返しながら、殆ど夢中になつて宵暗の中を駈り廻つたものです。

この謠をきくと今でもその幼い時のことが、なつかしく思ひ出されるほど、この謠はその子供の生活とよくひつ付いてゐるのです。かうして兒童の生活から、しせんと生れた歌が童謠なのです。

私の所の子供達の遊びにこんなのがあります。

よく雨だれ落ちに砂がたくさん集まつてゐるものです。その砂をたくさん集めて砂子の茶碗を造つて遊ぶのです。集めて来た砂を平らにならして、それに小さな肘で穴を幾つも幾つも明けます。そして井戸から水をふくんだり、すくつて来て、その穴の中に入れます。入れると砂は水をしん／＼と吸ひ込みます。水がすつかり吸ひ込まれたころ、砂の底から手をまわし入れて、静かにとつて見ると、小さな茶碗が出来てゐるのです。それで其の入れた水が一時も早く吸ひ込まれることを希ふ心が、その時の

兒童の心です。ほんたうに待遠しい心持でゐるのです。その待ち遠しい心持を抱きながら、皆はかう唄ひます。

しん／＼砂子、早やしなさい。下からよい子が水汲むぞ。しん／＼砂子早やしなさい。下からよい子が水汲むぞ。

かうして何遍も／＼繰り返し／＼唄つてゐる中に、水がすつかり吸ひ込まれます。そこで皆は静かに下から手を廻して、小さな茶碗をとります。出来た茶碗は木の葉のお錢で賣つたり買つたりして遊ぶのです。

つまり童謠といふのは、子供の生活のありのままの表現れです。この間山根さんが、かう云ふ童謠を作つてゐました。

○朝 顔

マツとキレイに、

咲いた朝顔よ。

今日の生命も知らないで。

児童の驚き、美しい驚きが表はれてゐるではありませんか。又「六月」といふのに、
こんなのがあります。

○六 月

麥の穂が出そろつた。

そろつた、そろつた、

さわく風の音がする。

その上をつばめ、

ついで飛んで、

くるつと返つて、

びんと伸びた翼で風を切り、

長いしつぽでかぢを取り、

麥の上をするやうに、

ついと来てははれ返る。

空でも土でも賑やかな。

なうれしき六月。

面白いでせう。序にもう一つ紹介しませう。

○草鞋とわかれて

x

わらぢよ。わらぢよ。

さようなら、

x

赤い夕日の森の中

切れたばかりに、

すててゆく。

わらぢよ。わらぢよ。

さようなら。

x

都そだちのお前故、

今夜は夢が淋しがる。

第五章 新しき綴方學習法

わらぢよ。わらぢよ。

さようなら。

これは自分のこれまではいてゐた草鞋が破れて、それを捨てる時の心持を書いたものですね。

一體これは何歳位の児童が書いたんだらう。

児童「十二三歳の児童だと思ひます」

さうですね。大てい皆さん位の児童でせう。して何んな折の作でせう。

児童「遠足をした時のかえりと思ひます」

さうですね、私もさう思ひます。赤い夕日となつてゐますから、秋の夕暮でせうね。ではもう一遍読んで見ませう……

……わらぢよ、わらぢよ、……さようなら……

赤い夕日の森の中……

凝つとその場のことを思ひうかべて下さい。では目をつぶつて下さい。凝つとその場の景色を思ひうかべて下さい。

一人の男の子が、とぼくと歸つて行きます。白い道が森の中を通して遠くつゞいてゐます。子供はもう跣足になつて歩いてゐます。草鞋をはき破つてしまつて、今し方その森の中へ捨てたばかりです。身體が餘程疲れて、汗ばんでゐます。

児童は森の方をふり返つて見ました。今し沈みかゝつた夕日が、赤く森を染めてゐます。少年は森の中に今捨てた草鞋を思ひうかべてゐました。森の中には闇がもう忍びよつてゐます。その小暗い森の中の太い杉の木の下に一足の草鞋が、淋しさうに捨てられてゐます。その破れた草鞋は、まぼろしのやうに少年の眼の前にちらつてゐます。

少年はもう一遍ふり返つて、諸を唄ひ初めました。しみじみとした悲みの心を一ぱい込めて、草鞋に向つた心で、唄ふと云ふよりは、寧ろ獨言のやうに云つてゐるのでした。

……わらぢよ、わらぢよ、さようなら……

赤い夕日の森の中……

切れたばかりに……捨てて行く

わらぢよ、わらぢよ、さようなら

都そだちのお前故

今夜は夢が淋しがる……

わらぢよ、わらぢよ……さようなら……

少年の瞳には涙が一ぱいたまつてゐました。赤い夕日の色は次第々々にさめて行きます。少年はその褪めかゝつた夕日の中を、とぼりとぼりかえつて行きます。

淋しい謠でせう。しかし尊い謠ですわ……。

これで大體童謠の如何なるものかお分りでせう。ではこの次の時間に皆さんの童謠を書いて戴きませう。皆さんの生活から本當に生れたものを書いて下さい。その人の生活を離れては、童謠のねうちはないのですからね。想ふまゝ極めて自由に書さる

へすれば、いゝ童謠が屹度出來ます。

以上の二例は、文を材料として、それに文話を加へたところの指導であつたのであるが、生きた自然を材料として文話を行ひ、そして親しく日常接する實際の事柄、自然の現象、人間の心の経緯……そんなすべてのものに對して、それを細かく判讀するだけの心の發育を助けることが必要である。私は範文を示して指導するよりも、時により以上の効果をおさめ得るものだと思ふのである。次に此の取扱の實際の一例をあげよう。

自然を材料としての指導——

それは春も次第々々に動き初めて、野にも山にも枯れた草や木の間から美しい芽生えが見られ、露の曇などは餘程伸んでゐるころのことであつた。私は明るい光線の一ぱい降り瀧ぐ、野の草の上に兒童を連れだすのであつた。そして天鷲絨のやうな軟か

い草の感觸をなつかしみながら、その草原の上に腰を下したのであつた。空は青く澄み渡つて、ところどころに白い卷雲の出てるのも見られた。私はこの大空の下、開かれたる教場で、兒童とともに、かうした氣持のいゝ春の氣分の中にひたり入るのであつた。

教師「皆さん！ 春が次第々々に動きだして來たね……」

あの高麗山をごらんなさい。

しかしまだちよこまつた冬の姿は容易にぬがないが、大分雲も少くなつたね。……紫色の影が谷にひそんでゐるのが見えるだらう。落付のある氣持のいゝ色だね。あれは朝のうすじめりに生れた春の靄なんですよ。

……あのなだらかな山の描く一線も本當にいゝね……

おや……静かにしてごらんなさい。何か鳴いてゐるぞ。………
雲雀ではないか！

兒童「雲雀です。」「雲雀です。」

教師「雲雀がもう鳴くのかね……もう一度聞いてごらん。静かに………」

兒童「やつぱり雲雀です」

兒童「たしかに雲雀です」

兒童「あそこにゐます」

みんなの視線がなごみ渡つた青い空を注視する。一生の指した一點に注視する。雲雀は黒い一點を打つたやうに、空の真ん中で鳴いてゐる。

教師「おゝ、雲雀が鳴いてゐるね。もう雲雀が鳴くやうになつたのかね……今日は二月二十三日……去年は二月二十八日に初めて雲雀の聲を私は聞いた。今年は五日早く聞いたわけだね」

兒童「先生私は昨日も鳴いてゐるのをききました」

教師「この中で昨日初めて聞いた人が何人居ますかね」

兒童「ハイ」「ハイ」「ハイ」

教師「一二三四……六人ある。ではそれより前にも聞いた人がありますか？。ありませんか。ではこの邊では昨日のが初雲雀だね……」

「おだやかな空……雲雀……明るく匂ふ日の光……麥もだんく濃緑をまして行く。

教師「油菜も大分伸んで行つたから、あの黄色い花を咲かすのも遠くはあるまい。私はあの菜の花を見ると、一時に春が来たやうな氣がする。しかしこの花の匂は何となく淋しい冷たさがありますね」

兒童「先生、莖ももう少ししたら咲きませうね」

兒童「たんぼぼも咲きませうね」

教師「もうすぐだらう。おや鐘がなつてゐる。では今日はこれでしまひませう」。

この指導は云はゞ自然のもつ光線と、色彩と、音響との交融した美しい諧調を味はせたい心持で行つたものであつた。自然のあらゆるものは色彩をもつてゐるのであ

る、そして色彩は光線によつて生き、光線には必らず陰影が添ふのであらう。又そこには美しい音律メロディを起すものもあらう。さうしてそれ等のものは、凡ての自然のものゝ形を深め美しくするものである。自然の中の一本一草もよく／＼凝視するならばそこには深い／＼汲み切ることの出来ない尊いものが綻びてゐるのであらう。その自然のものゝ本體を把握したとき、人間は神のやうな美しい輝をその人の身に帯びてゐるのである。

このやうな生きた事物の生命に直入する爲めの指導、自然のもつ無言の言語を判讀する指導は非常に尊いものがあると思ふのである。適宜かうした指導をなすことを忘れてはならない。

指導が終ると、やがて課題を與へるのである。

課題は指導事項の中心點を練磨するものとして使用せられなければならない。それで一般には或る一つの指導を終つた後に、それに適應した課題を提出するのがよいの

である。しかし場合によつては、指導したのみで別に課題を用ひないで、各自が選題して記述する場合もあらうし、又指導なくして直に課題を提出して記述にうつる場合もあるのである。これ等の方法は、何れも各特色をもつてゐるのであるが、要するに課題は指導を直接目的としてゐるのであるから、その指導事項を内容として包容して居なければならぬ。

さて課題が提出されると、如何なる心理作用が働いて、それが表現されるものであらうか、このことを豫め考察して置くことは、課題の価値を知る上からも、又その取扱上から云ふも極めて必要なことであると思ふ。

で、課題が提出されると、兒童はそれに依つて記述の外的刺戟を受けたことになる——つまり外部的に記述を動機づけられたのである。しかしこの刺戟の主動機が單に外部的であつては記述の力とはなり得ない。その外的動機が一旦内的動機へ變換せられなければならぬのである。外的動機が内的動機に變換するといふことは、創作活

動が働いて、その外的動機を征服して、自己の内部のものとするのである。その時初めて創作の緒が獲られる。

凡そ我々の生活そのものが、一種の課題生活になつてゐるのではあるまいか。風が吹く。雨がふる。夜がある。晝がある。生がある。死がある。……みんな我々の生活の上に課せられた課題ではないか。本當に我々の生活は課題から課題への生の持續であるやうに思はれる。

それでこれ等の課題——外的動機が強いといふことは、決して創作活動を弱めるものとのみ見ることは出来ない。否戦ひ得べき外的動機が數多く、而して強いと云ふことは、却つてその創作活動を煽り立てることである。科學的發明や、道德的思索や、藝術的製作や、宗教的信念は、さうした外的動機を征服した結果の産物なのである。人はこゝにまで自己を高揚したとき、「眞の自由」を獲得したことを自識する。「課せられたるものゝ中の自由」——それが眞の自由なのである。課題はかうした點にもそ

の長所をもつてゐる。

で、その與へられたる外部的動機なる課題が、自己の内部に全く包容せられて、内的動機に變移せられ、創作活動を開始せられるまでには、かなりの時間を要する。これは外的動機を征服する闘争の時間なのである。この點から考察して課題提出の要點として、記述までに相當の時間を置くことの必要が自然にうなづかれるのであらう。それで私は課題は多く前單元の學習の終りの数分間に於て提出することゝしてゐる。そして記述までの間に数日間の時間を置くやうにしてゐるのである。

さて記述に入ると極めて眞剣に、落付いた心持で、心の力を文字に念じ込む心持で静かに書いて行く。この場合教師も児童と同じ課題で文を綴つて行くのである。よく教師が記述中の児童の机を覗き込んだり、ゴツ／＼靴の音をさせたりして所謂机間巡視を行つてゐるのを見受けるのであるが、これ等は大なる徒勞であるばかりではなく、却つて悪い結果をもち來すものである。記述の際は極めて精緻な心的作用が働か

なければならぬから、常に靜謐な氣分が教室内に横溢するのでなくてはならないのである。

記述中の靜謐……白日の光のやうな静けさの中に、静かに幾十の児童と、一人の教師がペンを走らせてゐる。何といふ緊張した氣分であらう。沈黙の中にも、教室の中ははち切れるやうな氣分で充満してゐる。

靜謐の美しさよ。

黙々の中に動く偉大なる潜勢力の力強さよ。

静かなる暴風が、ほのかなる地平の果てから湧き上るやうな力である。かうした氣分の中に記述は完成せられなければならない。かうした中に生れたものであつてこそ眞の作品の價値を帯びてゐるのであらう。

かくして出來上つた作品は、やがて推敲といふ階段に至つて完成するのである。從來はこの推敲といふ仕事が非常に軽く見られてゐたゝめに、非常に綴方教授が不徹底

であつたやうに思はれる。それで私はこの推敲といふ仕事を、もつと徹底的に進めて行きたいのである。それで私の實際行つた例について述べて見たいと思ふ。

推敲指導のため必要なものは第一に文話の資料である。文話は記述前の指導の場合に用ひるもののみ限つたものではない。處理の場合に於てもその必要に應じて用ひた方がよいのである。この見地から私は推敲の場合にもいろいろな文話を使つて、推敲の指導を行つてゐるのである。

推敲の指導に用ひる文話の資料として、第一に上ぐべきは「推敲」の故事である。私は曾て尋三の兒童に對して、この話しを用ひたのであるが非常によく理解したやうであつた。私の話したのは「細素雜記」の中に出てゐるものに、多少の潤色を與へて話したのである。今それをこゝに轉載しよう。

唐書載賈島僧浪仙初爲浮屠、名無本來、東都、時洛陽令禁僧、午後不得出、島爲

詩自傷、韓愈憐之、因教其爲文、遂去浮屠、舉進士、嘗其苦吟、雖逢值公卿貴人、皆不之覺也、一日見京兆尹、跨驢不避、詰之、久乃得釋、會昌初以普州參軍、改司戶、未受命卒、余按劉公嘉話云、島初赴舉京師、一日於驢上得句、云島宿池邊樹、僧敲月下門、始欲着推字、又欲着敲字、煉之不定、遂於驢上吟哦、時々引手作推敲之勢、時韓愈吏部權京兆、島不覺衝至、第三節左右擁至尹前、島具對所得詩句云々、韓立馬良久、謂島曰、作敲字佳矣、遂與並轡而歸、留連論詩、與爲布衣之交、自此名著、後以不第及爲僧居、法乾寺號無本、一日宣宗微行至寺、聞鐘樓吟詠聲、遂登樓、於島案上取詩卷覽之、島不識帝、遂攘臂睨帝曰、即君何會此耶、遂奪取詩卷、帝慙、下樓而去、嘗爲長江簿、號賈長江、唐史與嘉話所載不同如此、

次に掲げたいのは、トルストイの「アンナ、カレニナ」に對する推敲の苦心談である。この話はトルストイの息子なるイリヤによつて書かれたもので、私はこの苦心談

をよんで、この作家の敬虔な態度に驚嘆せずには居られなかつたのである。

「アンナ、カレニナ」の校正刷が郵便で送られて来ると、父はそれに目をとほして訂正してゐた。最初は欄外に訂正の記號や句号を記入し次に一字々々を添削し、それから句を訂正する。棒をひいたり、書き足したりして、揚句の果には校正刷が隅から隅まで、インキだらけの化物となつてしまふ。此の儘で送つてやつても活版屋は讀み分けることが出来ない。これを清書することの出来るのは母だけである。母は夜通し机に向つて清書する。朝になると母の机の上に小さい、はつきりした字で立派に折たゝんだ原稿がのつてゐる。

朝起きると父はその清書を受取つて、最後の下見をやる。處が最後の下見が夕方一度繰返される。するとその時には、又もや原稿は臺なしになつて、文章はまるで新作物同様すつかり變つてゐる。父は申譯なさうに母をよんでやさしい聲で、

「ソーニャ（母なる人の名）よ、許してくれ。またお前の仕事を臺なしにしてしまつ

た。明日はきつと送ることにするから」と云つて再び母に清書をたのむ。

併しその「明日」といふ日が往々數週間、甚しきは數箇月も繰返されて、その間に原稿は幾度も訂正された。

綺麗に清書された原稿を受取ると、「たつた一箇所見るだけだ」と申譯のやうに言つて見初めるが、遂また夢中になつて添削にかゝる。校正を郵便で送つておいて、その翌日、或字句を思ひだして、俄に電報でそれを訂正した場合さへあつた。

私はこの話を尋六の兒童に向つて話したのであつた。そして私はトルストイの校正刷の寫真板を示したのであつた。兒童はこの話と、この寫真板とに依つて、少からぬ感動をうけたやうであつた。

この外文話資料としては、「時鳥時鳥とて明けにけり」と歌つた加賀の俳人千代女の話や、詩人グレーが一篇の詩に十四年を費した話。近くは「金色夜叉紅葉を殺す」と云はれた尾崎紅葉の話など、海の内外を問はず、さうした文話資料は遍ねく存在して

あるものであるから、それ等を適當に採擇して、兒童に話し聞かせて、推敲に對する氣分を養つて置くやうにせねばならぬのである。

推敲指導の方便物として最も適切なるものは、最も苦心になつた文の草稿及び校正刷である。これはその人のペンの跡をそのまま、現してゐる實物を用ひるにこしたことはないが、それを得ることが困難な場合には寫眞板を用ひてもよいのである。作家の原稿の寫眞板などは、どの文章雜誌でもよく載せられてあるもの故、それを切りぬいて置いて常に用ひることの出来るやうにして置きたいと思ふ。今私が實際教授に使用したものを掲げて見よう。

- 一、水野葉舟氏作小説「湖畔」の原稿。第一草稿、第二草稿、第三草稿
- 二、鈴木三重吉氏作「古事記物語」原稿
- 三、水野氏著「果のなる木」校正刷
- 四、トルストイ作「主人と下男」校正刷寫眞版

五、私の草稿各種

六、兒童の綴方の草稿。第一草稿、第二草稿の明らかに比較し得るもの

水野氏の小説「湖畔」の原稿は、全體で原稿紙百七十枚ばかりのもので、それが第一、第二、第三の草稿を経て完成してゐる。氏は「心を得ない作だつた」と云つてゐるけれども、實に彫心鏤骨の苦心の跡を物語るよい作であつたと思ふ。私はこの大部の原稿を教室の中にもつて出て、兒童を近く集めてその苦心の跡を親しく見せたのであつた。兒童は同氏の滴るやうなペンの跡に、その作家の眞率な態度に驚異の瞳を輝やかせてゐたのであつた。鈴木氏の原稿も同じく水野氏の原稿のそのやうに苦心されたもので、活版職工がこの原稿を受取つて「こん麼こみ入つた原稿をかく人間よりも、これを植字する職工の方がより偉い人間です」とこぼした程、眞黒くされたものである、私はこの原稿と氏の書翰とをもちだして、その苦心を物語つたのであつた。「果のなる木」は中學生叢書の第二編として出版されたものである。この校正刷は發

刊に先ちて、著者が私に送つて下さつたもので可成り推敲の跡の表されてゐるものである。小さな一つの句讀の打ち方にも、僅か一字のルビのつけ方、假名の遣ひ方にも、著者の細かな注意の行き渡つてゐるのが充分に認められる。句讀點の打ち方の指導には最もよい教辨物である。私は兒童を膝元によびよせて、親しくその校正刷を見せながら説明を與へたのであつた。

トルストイの「主人と下男」の校正刷は、アンナ、カレニナの校正の苦心談をなした時に用ひたものである。(この校正刷は金子薫園氏著「新しき文章の作り方」の巻頭に掲げられてゐるものである)校正刷の説明に、五千枚を越ゆるトルストイの大作「戦争と平和」の原稿は七回書き直されたものだ——と記されてゐるが、誠に一代の巨匠トルストイの苦心のあとを思ふと、そゞろに襟を正さしむるものがある。

最も卑近にして而も得易く、効果から云つても決して前者數種の教辨物に劣らないものは、教師自身の草稿並に兒童のそれである。

「これは私の草稿です。こゝに私の苦心の跡があります。よく見て下さい」さう云つて私はよく私の苦心の作品を示すのである。それは小品でも、論文でも、詩でもいゝ、たゞその苦心の跡が充分に紙上に現れて居たならばよいのである。兒童はそのペンの跡を通して、教師その人の眞實な努力に感激するのである。教師の草稿を示すことは「これは私の草稿です！」と云ふところに價值があるのである。

兒童の草稿に對しては、最もうまく推敲したものを毎回選みだして、「これは西古武代さんの草稿です。第一のがこれ、第二のがこれ。どれだけ苦心されてゐるか、又どれだけよくなつてゐるか、皆がよく読んで置きなさい」さう云つて教室の後ろの成績揭示場に張り出すのである。さうすると皆はそれを讀んで暗黙の中に、推敲の場合を會得するやうになるのである。そして「西古さんに出來たんだから、私にだつて出來る！」といふやうな努力の感を喚び起すのである。兒童から得た材料は、卑近なものであるだけ、その與へるところの効果も多いやうに思はれる。

しかし以上述べ來つた文話と方便物との提供のみによつて、推敲の力は養成せられるものではない。尙具體的な相互研究なり、個人的實習を経なければならぬのである。

推敲の相互研究をするには、先づ或る一兒童の作品を選出して研究の材料とするのである。そしてそれは騰寫版刷りとなして各兒に一枚宛配布し、その作品について研究させて置くのである。

○土 藏

いよいよ土藏がたつた。今日は大工さんが一人。手傳ひが二十人ばかり。午前中は壁つけで、午後は土たたきである。

二十人の人達が大きな木をもつて屋根の上にあがり、屋根の土を叩くのである歌に合はせてボンボンとたく勇しき。遠くの方まで響く氣持よき。

私もあまり面白さうなので、休みの折に屋根に上つて叩いて見る。すると高くて恐ろしくなつたので、やめて下りかけてゐると、孝吉君のお父さんが、「い、い、い、さか立ちをして見せてやらうか。」と云はれたので、「して見せなさい。」と云ふと「よし。」と云つてほんたうにさか立ちをして見せられた。其の時に木があたつて、その

木が下へ落ちた。ちようど下では小さい子供達が遊んでゐたので、その木は山根信勝君にあたつた。信勝君は痛さうにして大へん泣くので、私は下りて見るとほんたうに傷がついてゐた。幸ひ大きな傷でなくて皆がよるこんだ。(尋六 谷野)

先づ作者が通讀する。

教師「この間云つて置きましたやうに、今日は谷野君の作を材料にして推敲實習をして見ようと思ひます。それで皆が谷野君になつたやうな氣持になつて、この作を推敲せねばならぬのですね。ではその時の様子で分らない所がありましたらよくよく質問して置きなさい」

谷野君々々と呼ぶ者多数。作者指名する。

A 生「この文は、何處に興味をもつて書いたのですか」
作者「土たつきと、さか立ちです」

B 生「この文のしまひに『ほんたうに傷がついてゐた』と書いてあるが、何處に、

そしてどんな傷でした？」

作者「肩についたのです。傷は小さく血がにじんでゐるだけでした」

C生「落ちた木はどれ位な木でしたか」

作者「三寸角位、長さはこれ位の木だったでせう」両手にて七八寸の長さを示す。

D生「孝吉君のお父さんがさか立をされたことが書いてありますが、その場だけだったのですか、それとも歩かれたのですか」

作者「二三步と思はれるほど、歩かれました」

E生「土たゝきに使ふ棒はどれ位のものでした？」

作者「丸い棒で長さは一間位のものです」

F生「この日は天気はよかつたのだね。そして何月何日のことですか？」

作者「さうです。よい天気でした。四月十八日に蔵がたつたのですから……二十日です！」

教師「もう質問はありませんか」

児童「……………」

教師「では又分らない所が出来たら、今度は直接谷野君の所に行つて聞きませう。ではこれから、その作の推敲實習にうつりませう」

児童各自は騰寫版刷りの原稿に向つて推敲實習をする。作者も児童各自も、右の質問により想が新しい方面に展開して、推敲が深みへ向つて進んで行く。推敲して行く中に、分らなくなると作者について随意質問をなす。作者は小さい聲にて一々説明する。かくして一時間の後には推敲實習の成績が提出される。提出されたものは朗讀乃至廻覽によつて相互研究をする。その成績の一つを掲げよう。

○土蔵の土叩き

四月十八日に土蔵が建ち、二十日にはその壁つけであつた。

その日は大工さんは一人、手傳ひ二十人ばかり、午前中は壁つけ午後には土叩きであつた。

二十人の人達は、てんでに長さ六尺ばかりの圓い棒をもつて、屋根の土をたたくのである。
ボンボン、ボンボン……

登氣のよい音が、晴れた空をとほして遠方の方まで響く、それに呑氣さうな歌の聲もまぢつて、ほんたうに面白い。下では鼻汁をたれた子供や、子守などが仰向になつて、それを見てゐる。

餘り面白さうなので、私は休みの折屋根に上つて叩いて見た。木は重いと、屋根は高いし恐ろしくなつて下りかけてゐると、孝吉君のお父さんが「こゝにさか立ちをして見せてやらうか。」と云はれたので「して見せて……」と云ふさ「よし。」と云つて、ほんたうにさか立ちをして二三歩と思はれるほど歩いて見せられた。その時そこにあつた小さな木が手にあたつて下へ落ちた。ちよつと下では小さい子供達が遊んでゐたので、その木は山根信勝君にあたつた。信勝君は痛さうにして大へん泣くので、私は下りて見てやつた。すると右肩に小さい傷がついて血がちんでゐた。幸ひ大きな傷でなくて皆がよろこんだ。

かくの如く、児童は各自の力に應じてその推敲をなすのである。つまり自分の力に適ふだけの活動が出来るといふ點に於て、この方法は優れて居るやうに思ふ。

次に推敲實習の材料として私のよく提供してゐるのは、誤謬を含んでゐる短文である。これは児童の日常の成績品に對して注意してゐると幾等も見受けられるもの故、

それを蒐集して置いて推敲實習の用に供するのである。この場合も同じく謄寫版刷りとして、児童各己に渡し、相互研究をなすのである。次にその資料の數例をあげよう。

一、語句の重複したるもの

○一番恐ろしかったのは、町で犬に追はれたのが一番恐ろしかった。

○山には一ばい松が生えてゐて、その松の木の下には、秋になるとはつ茸やのめり茸の生えるよい山です。

二、混淆したるもの。

○とうとう勝負がついて、僕は奥田君が勝たれました。(主客混淆)

○私は兄さんと芳さんに魚釣りに行きました。(自動他動の混淆)

○それから遊んだり毬投げをしたりしました。(概念の混淆)

三、脱漏せるもの。

○お母さんに問ふとお母さんは、それはトンネルと云つて山をほりぬいた所で
す。(説明語をぬかしたるもの)

○私は顔を洗つて、空が曇つてゐました。(中途の語句を脱かしたるもの)

○私はおや今のは猫か、鼠か、それとも泥棒か思ひながら……(助詞を脱かした
るもの)

四、語句過剰のもの。

○朝早く寝たので朝早く起きて目がさめて、よい心持でした。

五、句の切れすぎたるもの。

○雀が二三羽居る。ちつちつと鳴いてゐる。しきりに地をつついて居る。餌をあ
さつてゐる。

六、句の續きすぎたもの。

○私は町の本屋で日本少年をよむと、すてきに面白さうなので、それを買つて讀

んで見ると、おもしろくてたまらないから、それを讀み／＼かえる中に、自轉
車につきあたり、ごろりところげ、着物をよごされた上に、足の指にきづをし
た。

七、語句の位置不適當のもの。

○雨がさびしく、銀の糸をひくやうに降つてゐる。

○大へんに徒歩で一等になつたときはうれしかつた。

八、誤謬とみとむるもの。

○朝早く起きて朝顔はひらくのを見ました。(助詞の誤り)

○どうしてあの可愛らしい弟を冷たい土の中に埋めたくはない。(呼應の誤り)

○何といふ淋しい姿ではないか。(詠嘆の誤り)

○雞にはいろいろあります。一羽五圓もするものあれば、ちやばのやうに小さな
ものもあります。(比較のあやまり)

以上はその一二例にすぎないのであるが、これ等のものを常に與へて實習させる
と、誤謬が比較的よく目につくのであるから、非常に興味をもつて活動するものであ
る。そして句に對しての正しい考を自然ともつやうになるのである。文はその短かい
一句々々にも作者の細かい注意が行つてこそ、初めて立派なものとなることが出来る
のである。幾千年も前から磨きをかけた玉のやうな句で、ぎつしり詰まつた文であつ
て、初めて立派なものとなふことが出来るのである。

かくの如くいろいろな取扱をなすのは兒童自身が自己の作品を自力によつて推敲す
るやうに導く階梯にすぎないのである。それでさうした取扱よりも、自力による推敲
の實習は、より多く行ふことが大切である。

自分の生命をぶちこんで作り上げた作品。それは自分の力によつてのみ眞實に仕上
が出来るのである。

推敲の獨自研究——そこにこそ、本當の價値が現はれる。それで私は何等の教師の

指導なき推敲の實習のために一時間乃至二時間を兒童のために與へることもあるので
ある。尋三の兒童の推敲の獨自學習の成績を次に掲げて見よう。

○じどう車 (原作)

ぶうぶう……じどう車がやつて来た。はい。はい。かうくをおとして走つて行つた。大ぜいの子ども
は、みんなそのかうくをひろつた。私は三枚ひろつた。じどうしやは赤い色の大へんうつくしいのでした。
そのあとから又じどう車がやつて来た。こんどのは黒いのでどろまびれになつてゐた。かうくも何にもお
ささずに、まげむりをたて、にげてゆきました。(尋三 踏遊秋夫)

○じどう車 (推敲作)

ぶう、ぶう……じどう車がやつて来た。はい。はい。はい。たくさんかうくをおとして走つて行つた。大ぜ
いの子どもは、みんなそのかうくをひろつた。私は三枚ひろつた。見ると「みちはひだり、くすりはホシ」
と書いてあつた。じどう車は赤色の大へんうつくしいのでした。そして赤い小ばたをたくさんつけてゐた。の
つてゐるのは三人でした。

そのあとから又じどう車が来た。こんどのは黒い色ので、ぶうとも何とも云はずにはしつてにげてしまつ
た。それはさつきのよりはすつとぼろでした。

だまつて土けむりをたててにげてゐるのはおかしかった。

この原作と推敲作とを比較して見ると、如何によくなつてゐるか分るのであらう。そして作者の眼がいかによく開けて來てゐるかも分るだらう。

かうして兒童の獨自學習によりて得たる原作、推敲作については、教室の成績品張場に於て揭示し、一般兒童に熟讀玩味させるのである。一般兒童はこの模範的推敲が事實化されることによつて、更に推敲に對する興味と努力とを喚起し、自己の作品に向つて眞實に推敲を行ふやうになるのである。こゝに至るともう綴方學習は堂に入つたものと見ていゝのである。

兒童の推敲作が提出されると、次には處理をなさなければならぬ。從來成績物の處理として、所謂「簿上訂正」と云ふものが行はれて居た。これは實に無駄な骨折であつたと思ふ。無駄な骨折として教師の草臥れ儲けだけで終るのだつたら我慢も出來よう。がこの所謂簿上訂正は教師の思ふまゝなる添削で、何等兒童の生命から出發

した所の添削でなかつたから、時に虚偽を教へることになつてゐたのである。苟も他人の作品に手を加へるといふことは、さう易々と出来るものではないのである。教師は添削の相談相手にはなれるが、教師自身の手で添削するといふことは絶対に出来ない。誤られてゐる語句や文字なども、印をつけて再考させるやうにしたいものである。從來處理に於て取扱はれてゐた添削なるものは、實に兒童の生命を冒瀆して居たものと思ふのである。

しからは處理の場合には何をするのであるか、それには随分といろいろな仕事があるが、就中重要な仕事は文の分析的研究と、批評鑑賞に關する取扱ひである。尋六兒童課題「思ひ出」に於て取扱つた材料を例として述べて見よう。

文の分析的研究指導の實際 —

さて記述前の指導に於ては、細かい研究は殆どしないのがよいであるが、記述後の處理の場合に於ては、可なり細かく立入つて研究を進めた方がよいと思ふ。それは

ち二三日して、この村にかえつて伯父さんの家にとよつてゐるのです。そして兄は私よりも三つ年上で、三人一所にゐましたが、兄は長くこゝにゐることが出来ませんので、私より早く大阪に行き店員になりました。お父さんもその秋大阪においでだったので、今は僕一人で伯父さんのお世話になつてゐます。私も學校を卒業したら大阪に行かればなりません。(尋六 B Y)

私はこの文を見て、可成りうまく書いてゐると思つた。しかし何處か物足らぬ所があつた。それは平板を行くやうな單調さが感じらるためであつた。この單調な感じは一たい何處から來るのか、それは自然の生きた組立を、そのまゝ文の組立として表現してゐないからだと思はれた。つまり文の組立方に失敗してゐるのである。そこで私はこの兒童に對して次の質問を試みた。

問「大へんうまくかけてゐます。私は初めてあなたの身の上話をきいて涙が出ました。あなたがほんたうに、しみじみこの身の上のことを思ひだしたのは何時でしたか」

答「それはこの間の晩方、町からかえる途中でした」

問「ではその時のことも書き入れて貰ふと、もつとよくこの文の氣分が出るのではあるまいか」

答「さうです！ ではもう一ぺん考へ直しませう」

次の日、この兒童は、新に記述した次の文を私の手許に提出した。

○僕

僕は今伯父さんの家にお世話になつてゐます。父も兄も大阪に上つて働いてゐますが、僕のみが伯父の家にお世話になつてゐます。そして學校に通つてゐるかたはら、店の手傳をしてゐます。僕は此間の夕方になつてから大八を引いてとぼりく町に行きました。そして白砂糖十斤と、ほそ目昆布二貫匁、鯖十本、うどん一箱とを買つてかへりました。歸りはもう暗くなつて、うすい月あかりをたよりに、とぼりくかへりました。かえりながら僕は僕の身の上のことをつくづく思ひました。僕は何といふいろいろな運命にひきづられて行く、とかと思つて涙が出ました。そして思ふとはなしにこれまでのことを思ひうかべました。僕の生れた神戸から朝鮮、朝鮮から大連、大連から今迄のことが目の前にちらついて來ます。僕は神戸から生れたのです……

冒頭にこれだけが附け加へられて提出されたのである。「文の組立」に對して僅かな

暗示を與へたゞけで、かく整つた立派な文になつたのである。簿上訂正といふやうな従来のやり方と比べて、どれだけ有意義なものであるか分らない。私は勞力少くして効果のより多い處理法の一つだと思ふのである。それで私は従来の簿上訂正といふやうなやり方は少しもしないことにしてゐる。もし添削する必要のある場合は、作者を呼びよせて、その場の様子を聞き取りながら、筆を加へることにしてゐる。その他はすべてこゝに掲げたやうな簡単な暗示を與へるに止めて、他はすべて兒童自身の活動に委してゐるのである。

物の觀方にしろ、文の段落の立て方にしろ、比喩の仕方にしろ、すべてかうした指導から進んで行くやうにしてゐるのである。そして文の分析的な見方の指導をなしてゐる。かうした指導がやがては、批評鑑賞の力となるのである。

次に批評鑑賞に關する相互研究について述べなければならぬ。同じ課題「思ひ出」の作品についての相互研究である。

實地教授

峯地「この間皆さんが出しました課題「思ひ出」は、可なりうまく書いてゐたやうでした。どの人の作品にも、それ／＼精一ばいの力がはいつてゐましたから、讀んで大へん愉快でした。しかし始ど完全と思はれる作は三人ばかりしかありませんでした。大部分の作がまだ／＼と思はれるものゝみでした。一層努力していゝ作を出すやうにして欲しいものです。皆さんの手許に刷つてわたしてゐます景山さんの「お別れ」の如きも、可なりうまく出来てゐるのですけれども、これとても缺陷が認められますので、皆さんに訂正してもらつたわけでありました。で今日は前時に考へて置きました批評や訂正の箇所を發表していただいて、この文を正しいものといいたしたいと思います。

ではいつもの通り、作者に原文を朗讀していただいて、それからその自評をしていただきますませう」

「景山さん！」「景山」ハイ」

景山「それではこれから私の「お別れ」を朗讀いたしませう」

○お別れ

或時おぢさんの所から御手紙がきた。其の時家の中では僕と弟とおばあさんだけであつた。おばあさんはちよつと受取つて「これは登山の山と云ふ字が書いてあるが、おぢさんの所から来たではないか。」と云はれたので、ちよつと見て「おばあさん、おぢさんの所から来た。」と云ふと「こなえだひさし手紙をごさだつたが、どうゆう事だ。」といはれた。僕は「それでもおさうさんがかへられるまでかうしておかう。」といつて引出の上ののしておいた。しばらくするさおとうさんがかへられたので「おとうさん、おぢさんの所から手紙がきた。」といつて引出の上の手紙を父の手に渡した。父はすつとよんでゆきて、しまいになつてからつまらないかほをしておばさんに「嘉一がシベリヤに行くといや。」といはれるとおばさんもかなしげなかほをして「ほんとにや。」といつて目に涙を一ぱいにしておいでたので、僕もそれを見ると、涙が出るやうな心持がした。弟も僕と同じやうだつたがらう。なまけないやうなかほをしてゐた。それから三日目の朝飯食つて少しやすんでゐると、くつの音がぐつちくぐつちくとしたので「だれだらかな。」など話をしてゐると内に入つてきて「あ、かへつた。」といはれたので出て見るとおぢさんである。手紙にはシベリヤに行くと書いてあつたので、皆は「もう大分行きておいでるのであらう」など話してゐたのかへつてこられたので、皆は丸い目をして大をどろき。それが

らおぢさんはくつをぬいで上られた。父はうしろし涙をさへて「やあどげな事だつたらやんばいにもどつてこいてばあさんがよるこぼはんすわ。」など話をしてゐると、おばあさんは「嘉一やもどつてこいたかや。」といつてせのかみをおこしく云つてこられた。おぢさんは「もう午後はた、ればいけないから何やかや用意をせればならん。」といはれたが、父は、「まあ幸にもどつただからどうゆう事でもかえれぬかもしれぬから少したばこせ。」と云はれたのでたばこをしておられた。するともうでればならないので用意して出かける。内中の者は皆涙をこぼしく見送るのである。水車の上から皆は「もうわかれます。」といつてこちから「萬歳々々。」と云ふとおぢさんも「萬歳々々。」といつてわかれた。皆は涙をひざの上にポトくとをとしてないた。

(大正一一、一、一一)

景山「次に此の私の作について、自評をいたします。この作は僕のおぢさんが、シベリヤに行かれたとき、大そう悲しい別れをしたので、それで「お別れ」といふ題をとつて書いたのであります。僕はこの「お別れ」と云ふ文は一つも直してゐません。後から読んで見ると、たくさんまちがつて居るところがあつた。その二三を云つて見ませう。

先づ初めを讀んで見ると、だれがだれにものを云つて、だれが返事を云つてゐるか

分らない所がある。例へば「おばあさんはちよつと受取つて、『これは景山の山と云ふ字が書いてあるがおぢさんの所から来たのではないか』と云はれたので、ちよつと見て、『おばさん、おぢさんの所から来た』と云ふと『こなえだひさし手紙をごさだつたがどういふ事だ。』と云はれた」といふところである。これはかう書いた方がよいと思ふ。「おばさんはちよつと受取つて、『これは景山の山といふ字が書いてあるが、おぢさんの所から来たではないか』といはれたので、僕はちよつと見て『おばさん、おぢさんの所から来た。』といふと、おばさんは『こなえだひさし手紙をごさだつたが、どういふ事だ。』といはれた」と書く方がよいと思つた。たと「僕」と「おばあさん」とがおちてゐるだけでも大へんよみにくいと思つた。

又用意せられるところを、もつとくわしく書きたいと思つた。それは「着物、けつと、かうりなどそろへて、父はそれを負つて見送つて行きなさる。」と書いた方がよいと思つた。この外、字のまちがつてゐるところもある。

僕はかなりうまく書いたと思つて居たが、あとから考へて見ると、まちがつたところがたくさんありました。

峯地「作者景山さんの申分はよく分りましたから、次には他の人々の批評をきゝませう。北野さん！」

北野「私の考を發表いたします。」

この作はよほどうまく書いてゐますが、初めの出しが少しわるいと思ひます。「或る時をおぢさんの所から手紙が来た」などいふ所を、もう少しくわしく書くのがよいと思ひます。もう初めの出しさへよかつたならば、景山君の綴方はまあ十分だらうと思ひます。すん／＼読んでいく中にだん／＼面白くなつて來ます。たとへばおばあさんが手紙を見て『これは景山の山といふ字が書いてあるが、おぢさんの所から来たのではないか』といはれた所などはほんとに味がある。おばあさんは景山の見やすい山と言ふ字ぐらゐは知つて居られたのだらう。

この題のお別れについて、も少しかなしみを書くか、又何とか目あたらしい題にするよ。又この題で景山君の考への一ばんうまいところは、おしまいのくくりである。おちさんとお別れするときに萬歳をとへた所は何とも云へぬ味がある。この文の中程もほんとに面白い事ばかり書いてある。おちさんがかえられたとき、父が『やあどげなことだつたらやんばいにもどつてごいて、ばあさんが、よろこばはんすわ。』と云ふ事などは方言でそのまま書かれてあつて、よけいに面白くなつてゐます」

峰地「北野さんの批評は大體褒めてゐるやうであります、その中にも二三缺點について云つて居ました。何々でしたか。」

兒童「ハイ、ハイ、ハイ。」(舉手)

峰地「Aさん！」

兒童「題のつけ方が悪いと云つてゐました。」

兒童「書き出し所が悪いと云つてありました。」

峰地「さうでしたね、では書き出しはどうしたらいいでせう？」

兒童「晩方こたつにあたつてゐると、をぢさんから手紙が……といたします。」

兒童「或る冬の寒い晩のことをぢさんから……とします。」

峰地「さうだね、或る時では、あまり一般的な云ひ方で、その日の個性が表はれな
いね、今云つた二人の考はいづれもよいが、「冬の或る寒い晩、をぢさんから……」と
なほしませう。それとついでにをぢさんの居所も書きませう。何處で何をして居るを
ぢさんか、この文のどこにも書かれてゐないから、讀むものの心をまどはします。

景山さん、叔父さんはどこで、何をしてゐるのです。……」

景山「兵隊の叔父さんです。」

峰地「ではかう直しませう。「冬の或る寒い晩のこと、兵隊のをぢさんから一通の手
紙がとどきました。」ではさう直して下さい。」

峰地「次に北野さんは、題を目あたらしくするやうに云つてゐましたが、これにつ

いては吹野さんが最もくわしく論じてゐますから、吹野さんの意見を聞きませう。吹野さん。」

吹野「私はこの文の題のつけ方について、私の意見を述べます。景山君の文はをちさんとの「お別れ」の事が涙を出す所や喜ぶ所など、大そうよく書いてあります。題は「お別れ」となつてゐるが、讀む時に誰と「お別れ」したのか分らないから、「をちさんのお別れ」と書く方がよいと思ひます。景山君は今から六年間のことをふりかへつて見て、丁度よい「お別れ」の題があつたので、景山君は思はず「お別れ」と題にしたことと思ふ。あの面白い童話などならば、ふつと出て來た題そのまゝでよいが、こんな文は中味を書いて置いて、それから題を考へるがよい。もう少し題の事で頭を練つたら、題と中味とがびつたり合つたのであらう。けれども景山君の頭のねり方が少かつたからいけなかつた。題はそちのけにして、中味だけうまく書いてやらうと思つてもそれではいけません。ですからまづ題を思はなければならぬ。この文の中味はよい

けれど題でしつばいした。景山君の「お別れ」と云ふ題をもう一つの「おちさんとお別れ」としたら、この文はよほどよくなるだらう。六年生の作としては八點五分位と思ふ。」

峰地「題のつけ方については、只今吹野さんの意見の外四五人の人が論じてゐるやうでしたが、こゝではそれを一々讀んで貰ふわけに行きませんから。他の人によつて考へられた題の名をこゝに掲げて、更に皆さんにどれが一ばんよいか考へて戴きませう。」

(板書)

- 一、お別れ
- 二、をちさんとお別れ
- 三、シベリヤに行くをち
- 四、をちさんからの手紙

いては吹野さんが最もくわしく論じてゐますから、吹野さんの意見を聞きませう。吹野さん。」

吹野「私はこの文の題のつけ方について、私の意見を述べます。景山君の文はをちさんとの「お別れ」の事が涙を出す所や喜ぶ所など、大そうよく書いてあります。題は「お別れ」となつてゐるが、讀む時に誰と「お別れ」したのか分らないから、「をちさんのお別れ」と書く方がよいと思ひます。景山君は今から六年間のことをふりかへつて見て、丁度よい「お別れ」の題があつたので、景山君は思はず「お別れ」と題にしたことと思ふ。あの面白い童話などならば、ふつと出て來た題そのままでもよいが、こんな文は中味を書いて置いて、それから題を考へるがよい。もう少し題の事で頭を練つたら、題と中味とがびつたり合つたのであらう。けれども景山君の頭のねり方が少かつたからいけなかつた。題はそちのけにして、中味だけうまく書いてやらうと思つてもそれではいけません。ですからまづ題を思はなければならぬ。この文の中味はよい

けれど題でしつばいした。景山君の「お別れ」と云ふ題をもう一つの「おちさんとお別れ」としたら、この文はよほどよくなるだらう。六年生の作としては八點五分位と思ふ。」

峰地「題のつけ方については、只今吹野さんの意見の外四五人の人が論じてゐるやうでしたが、こゝではそれを一々讀んで貰ふわけに行きませんから。他の人によつて考へられた題の名をこゝに掲げて、更に皆さんにどれが一ばんよいか考へて戴きませう。」

(板書)

- 一、お別れ
- 二、をちさんとお別れ
- 三、シベリヤに行くをち
- 四、をちさんからの手紙

「この中でどれが、先づ一ばんいけないか。いけない方から削つて行きませう。」

児童「一ばんがいけません」「ハイ」「ハイ」(賛成の聲と共に舉手)

峰地「さうですね。「お別れ」と云つたつて、私と景山さんと別れてもお別れだし、三浦さんと山根さんと別れてもお別れだし、これは何處に使つても使はれるやうな題だね。こんな題を「動く題。」と云ふのです。動く題(板書する)ハイ一所に云つてごらん。

齊唱——「動く題。」

動く題はなるべくつけないやうにするのがいいのです。では次はどれがいけないのですか。

児童「シベリヤに行くをぢです……」「ハイ、ハイ、

(賛成の聲)

児童「をぢさんからの手紙です。」「ハイ、ハイ(同上)

峰地「ではをぢさんとお別れが一ばんいゝのですね?」

児童「ハイ、ハイ、ハイ。……」

峰地「ではこれに一ばん賛成者が多いやうですからこの題に直ませう。しかし同じこの題を用ひるにしても、もう一つ考へて貰はねばならぬ問題がある。

板書 一、をぢさんとお別れ

二、叔父さんとお別れ

三、をぢさんとおわかれ

この中でどれが一ばんよいでせう? 同じ題でも、その書き現し方によつて、それぞれ気分が違ひませう」

児童「ハイそれは二番目の題が一ばんようございます」

児童「賛成です。」

峰地「それでは二番目の題に皆さんが賛成のやうですから皆さんがその題に直して

下さい。」

峰地「すみましたか、では次は仲田さんの批評を聞きましょう。仲田さん！」

仲田「ハイ」初めの出しはよいが、句が長すぎて二行から五行まで行きわたつてゐる。行のかへ方もいけない。この文にも、首・胴・尾があるから行をかへなければならぬ。心の調子と文の調子がびつたり合つてゐるのは面白い。文の中心點が、お別れする處にあらはれてゐて面白い。題の取方は「お別れ」と書いてあるが、かなしさうな題であるから、もつと悲しく、くわしく書くがよい。句讀點は正しくない。又方言がそのまゝつかつてゐるのは面白い。もつと漢字を多くませて書くときよかつたに、六年生の作としては八・五點位と思ひます。」

峯地「仲田さんの批評の中で、悪いところが云ひ出されてゐましたが、どんな所でしたか。」

兒童「行のかえ方がいけぬとありました。」

同上「句がつゞきすぎてゐるとありました。」

同「漢字をもつと多くませて書くがよいとありました。」

同「句讀點の打ち方のいけないこと、もつと悲しいことをくわしく書けと云つてありました。」

峯地「先づそんなことだつたでせう。一ばん初めの行のかへ方に関する意見には皆さんも賛成だらう。あまり初めからびつしり書かずに行をかえて、書いた方がいゝでせう。では仲田さんの云ふ通り、この文首、胴、尾の三つに分けて、行をかへませう。この文の首はどこ迄ですか。」

兒童「引出の上ののせて置いたといふ所までです。」

峯地「さうだね、ではしばらくすると……」から行をかへなければなりません。ではそこに「別行」の文字を入れなさい。次に胴はどこまでですか。」

兒童「十六行のおちさんであるといふ所までです。」

同上「二十六行の見送るのであるまでとす」

峯地「どちらでもいゝやうだが、前の意見によれば胴が短かすぎるやうに思れるし、後の意見によれば、尾があまり短くなる。それで私はその中程の所の……たばこをして居られた……までとしたい。どうだらう、ではそこにも「別行」と書いて下さい」

峰地「書き入れましたか、では次は長くつゞきすぎてゐる句を二つに切りませう。どこから切つたのがいゝでせう。」

兒童「三行目の……と云はれたので……の「ので」をとつてしまつて「た」で切つてしまいます。そして「それで僕は」とその次に入れます。」

峰地「左様、それで大へんよくなります。皆さん、さう直して下さい。」

峰地「書いてしまひましたね。では次に漢字を多く書くことや、句讀點の打ち方を直すことがありましたか、これは皆さんで考へて、あとから直して下さい。それから一ばんをしまひの「悲しきをもつとくわしく書け。」と云ふ意見に對して、これと反對

と思はれる意見がありました。勝部忠秋さんのがそれでした。それでこの次は勝部さんの意見をきませう。勝部さん！」

勝部「私はこの文の終りの閉ぢ方がよくないと思ひます。かういふ時にはうれしく、勇ましくせねばならぬのに、家の下まで出て、皆がひざの上に涙をこぼして泣いたとはいけない。それはかうかいたらよいと思ふ。出られる時、家の人は國の忠義だから出てなるべく、名譽の戦死を遂げて、勇しくかへれと云つて、皆は涙を一つもこぼさないで、勇しく活動寫眞のやうに出て行きなさいました。見送つてかへつてから、おばあさんが泣かれるので父が、なんで泣きなさる。かう云ふときは勇しく、悲しくないやうにするのがよいのだ。それはやつぱり國のためのお忠義だから、今おだまりと云つて少しも悲しむ色がなかつた。とかういふ風にかくとよいと思ひます。もしたらこの文は益々よくなると思ふ。そして終りの閉ぢ方がよくなつて、ずつと生々して來ると思ひます。」

峰地「この勝部さんの意見と仲田さんの意見とについて、皆さんはどう思ひますか」
兒童「もつと悲しく書くのがよいと思ひます。」

同上「悲しく書いてはいけません。」

同上「活動寫眞のやうに勇しく出るのがようございます。」

峰地「これについて私の考を述べさせていただきます。景山さんは悲しかつたことを、そのまま書いたのですから、それで文を綴るとき態度から云つて大へんよかつたと思ひます。景山さんが實際悲しかつたのに、うれしかつたやうに書いたらこの文は死んでしまいます。もつと悲しかつたら、もつと悲しく書いてよいのです。仲田さんがもつと悲しく書けよと云つたのは、もつと悲しい事があつたらうと思ふ心から、もつと悲しく書けよと云つたのであらう。さうすれば此の仲田さんの意見も正しい。そんなら勝部さんの意見はどうかと云へば、私はこれも正しいと云ひたいのです。勝部さんはその時に持つべき心の根本に向つて論じてゐるのです。つまり悲しみの中に

喜びを見よと云ふのである。苦しみの中に楽しみを見出せといふのである。彼の高千穂艦の「水兵の母」の如くあれといふのである。この論も實に尊い論だと思ひます。つまり仲田さんのは文を綴る方法の上の論であるし、勝部さんのはその場合に於ける精神の持ち方について根本的の論であるのです。論の立て所が異つて居るのですから、この二つの論は優劣を比較しない方がいゝのです。私はこの二つの論はどちらも正しいと思つて敬意をはらつて讀みました。私の意見が分りましたか。」

「ハイ」「ハイ」

峰地「では時間が餘程切迫して來ましたから、批評はこれで終りたいと思ひます。そしてこの文の目立つて悪いところを二三訂正させよう。何處か皆さんで直したいところはありませんか」

兒童「おちさんの「お」がまちがつてゐます。」

峰地「さうだね。この「を」だつたかね。」

兒童「二十三行のをぢさんばの下に讀點をうちます。」

峰地「さう……」

峰地「まだ多少なほす所がありますが、時間もありませんから、私が二三云ひますから、皆さんはそこで直して下さい。私の云ふことをすぐに直してゐる人は勿論直すに及びません。」

峰地「二十五行の「さうすると」を「さうする中に」となほす。「出ねばならないのでをならない時が来たので」となほす。二十六行「見送るのである」を「見送るのであつた」と切つてしまふ。「水車の上から」を「水車の上から見送つて」となほす。二十七行「わかれませうと云つて」を「わかれませうと云つた」と切つてしまふ。

訂正はこれ位にして置いて、この直しの入つた文と私の批評文とを讀んで見ませう。

(訂正文の朗讀……)——省略

批評文の朗讀

峰地「私ははじめこの文の題と、この文の書きだしを見たとき平凡なものだと思つた。しかし讀んで行く中におばあさんの會話の「これは景山の山といふ字が書いてあるが、をぢさんの所から来たのではないか。」といふ言葉に出會ふと、おや面白いぞと思ひ初めた。そしてそれからしまひまで、何かひきづられて行くやうな心持の中に、すつかり讀ませられてしまつた。讀んでしまつてから缺點もあるが面白く書いてゐるなと思つた。

この文の中心點は人間の美しい愛情である。

おばあさんが「こなへだひさし手紙をごさだつたがどういふことだ。」といつて、我が子の身の上を案じて居るところや、又景山君のお父さんが「やあどげなことだつたら、やんばいにもどつてごいて、ばあさんもよろこばはんすわ」といふところには、親に對する愛や、弟に對する愛がよく出て居る。私はこれを讀んで行く中に、そのしみじみした愛情に包まれて、いつとはなしに涙ぐましい心になつて居るのであつた。

かうした事柄を見出して、それを有りの儘に現した作者の心は實に尊いものだと思ふ。本當に物事に對して、深い愛を感じる人でなくては、とてもかうした材料をとり來ることは出來ないのである。

しかし表現の仕方については、まづい所も見受けられる。題の名の「お別れ」となつてゐるのもその一例である。「お別れ」といへば餘りに一般的である、何とかもつと個性をよりよくあらはす題がありさうなものである。

書き出しももう少し工夫をしたいものだ。それからおしまひの書き方もまずい、あれもどうかせなければならぬ。尙假名遣の間違や、句讀點の打ち方の悪いところなどが見受けられた。面白くよんだけれども、こんな所がちよいちよい目についたのは嫌なことであつた。この文は六年としては八點五分位と思ふ——これで丁度時間も來ましたから、おしまひにいたしませう。あとで又よく今日の批評を思ひ返して、この文をよんで見て下さい。

峰地「ではこれで、おしまひにいたします……」(終)

以上で大體私の考へてゐる綴方學習の系統、及びその實際について述べたやうに思ふ。本當に字義通りの大體に過ぎなかつた。與へられたページで、その總ての例をあげて説述することは到底出來ないことであつた。それでたゞその大體に止めて、他は讀者諸賢の御諒察に委しみたいと思ふのである。

要するに綴方學習の要點は、創作的學習と輔導的學習と、獨自學習と相互學習と互に盾の兩面となつて、適當に進められ、その間を教師の指導が正しく縫ひ込んで行つて、綴方の成績は正しく伸んで行くのである。それですべて其の取扱はその時その場の事情によつて、常に變つて行くべきものである故、この要點を基礎として取扱つて行つたならば、謬るやうなことはないと思ふ。

終りに——

それでこの稿を終るに當つて一言したいと思ふ。

この私の教授法は、主として教師の心得を書いてゐるので、どうしても教師本位になり、教授とか指導とかいふやうな方面の色が濃ゆくなつてゐると思ふ。指導や教授といふやうなことは、つまりは児童自身に道を開かせるためである。指導よりも教授よりも大切なのは、児童自身が自分の道を開いて行くことである。で綴方に於ける教師は多くの場合、寛容な態度で児童を思想の運動場に放ち遊ばせてゐる心持でゐなければならぬ。その思想の運動場で嬉々として遊んでゐる児童達を傍の芝生の上にも腰を下して観入つてゐる態度でありたい。時には駆け出して児童と一所に鬼合をしたり縄飛びをしたりする心持で指導するのである……これが綴方の常態である。……決して暴君のやうな厳めしい態度で指導してはならない。

教師は何よりも、深い愛情をもち、もつと密接に働らく理解をもち、強い情熱と執意とをもつて、児童の自由を傷けないやうにすることが肝要である。これが本當に人間の友情といふものであらう。これが教師としての一ばん大切なもち前である。この

持前は正直な心と明るい良心とをもつことから生れる。綴方の教師は、いろいろな難かしい書籍をよみあさるよりも、かうした卑近な所に着眼して進精する方が大切である。學者にならねば綴方の指導は出来ないものと思つては、大へんな間違ひである。綴方の指導は却つてさうしたペダンチックな人には出来ない仕事なのである。

この點について、どうかお互に明らかな心持をもちたいと思ひます。

第六章 著者の小品

- △野菜の芽
- △日常生活
- △新米
- △恐ろしい「モリ」の話
- △我が発表は我が生命の飛躍である
- △研究教授の後に
- △作物改良王バアベンカ

第六章 著者の小品



年をとつていく中に、我々はよりよく生長して行くことが出来るのだ。
生長して行くの中なる我が魂を思ふと、年をとることは一つの喜びである。
年をとることを悲しむものは生長の喜びを知らないからだ。

(大正二一、二、二)

野菜の芽

九月二日に播いた野菜の種が、四日の朝には發芽し、それがその晩方までには、その日の温熱を悉く吸ひとつて、八分通りと思はれるほど美しく芽をだした。九月一日に適度の雨があつたために、こんなによく芽をだしたのであらう。軟らかい黒い土の床の上に、寶玉のやうな野菜の芽が美しく並んでゐる。そしてその一つ一つは清らかな露とオゾンを含んで、尊いその生命を二つの子葉の上に盛つて、極めて生々とした氣分を見せて、この澄み切つた秋の空にすん／＼伸んで行く。

一雨毎に秋は青く澄んで行つた。空は芳醇な酒のやうに美しく見られた。す／＼にも響きださうとするやうな或る力が空間の何處にも漲り渡つてゐるのが感じられる。

私はこの美しい初秋の空の下に、みがかれたやうな美しい野菜の芽が偉大なる生命力を現はして、すん／＼伸んでゐるのを見ると、何か知らず自然の啓示でも聞かさ

ゆるやうに敬虔な心持になるのである。私は毎朝この野菜畑に来て、深い深い呼吸を幾度も幾度もするのであつた。私もこの野菜の芽とともに大きくなつて行くやうな心持になつて……………。

ひんやりとした朝の風が頸のあたりをなで、行く。秋らしい雲が地平の彼方に静かに動いてゐる。風を追ふやうに、秋の大きな太陽が静かにのぼる。小さい白金の断片でもころがるやうに、白い光がちらちらと野菜の根元にこぼれて、水晶のやうに透明な莖のかげに消え去つてしまふ。

土壤はいつも適度の水湿と、適度の膨軟さを持つてゐる。野菜の根はこの土の中に自由に伸んで、その根毛の尖頭から思ふままに養分をとつて、日一日とその葉をひろげて行つた。今年はさるはむしや黒菜蟲が発生しないので、ふくらみをもつた二つの子葉は、正しいあのハート形を、少しも損することなく何時までも止めてゐる。そしてその間から勢のいい本葉が現はれて来る。何といふ元氣にみちた……そして氣持

のよい成長だらう。本當に葉の中の葉緑粒の一つ一つが躍つてゐるのではあるまいかと思はれるほどの生氣が葉の全面に溢れてゐる。

體菜と大根とは殊によく成育して行つた。しかし白菜のあの黄綠色の葉は見るだけで心が生々する。白菜は移植すればよく結球するといふので、双葉の中から二畦ばかり移植して置いたのであるが、何れもよく活着いてゐる。

九月十日には早や二枚目の本葉が見られるほどの速かな生長を示してゐた。私は朝それを見てひとりで心を躍らせてゐた。

その日の午後であつた。風がざわ／＼と鳴つて、仕事をしてゐる窓の硝子を透して裏の芭蕉の葉がさんざんに痛められてゐた。私は事務をとりながら、それを見て私の菜園の野菜の芽が痛々しく、風に戦つてゐるのを、目の前に思ひ浮べた。

私は家に歸ると、すぐ上着をとつて、裏の菜園に出た。野菜の手入れをしようと思つたからである。

體菜の芽はよく伸んでゐるため、折りくぢられてゐるものもあつた。白菜は莖が短かかつたため、割合に痛められてゐなかつた。しかし昨日とは見かはるほどに菜園が荒れてしまつてゐる。私は傷けられたやうに暗い心になつた。

私はすぐ鍬をとつて手入れにかゝらずには居られなかつた。土をこまかく碎いて、それを一々叮嚀に、その芽の一つ一つに土寄せをした。恐らくこれほど集約的に、これほど細密に勞力を用ひることは出來ないと思ふほどに綺麗に土をよせた。私の指先は土をいちつたために、眞黒くなつたけれども、そのかわり菜園は美しく整理された。野菜の芽は温かい土の懷に靜かに眠つて行くやうに思はれるほどのくつろぎを見せてゐる。

私はしばしそこに立つて、美しくなつた菜園を見た。そして何か知ら平安な心持になつた。

その夜、私はふと目をさますと、風は全くおさまつて、外は雨になつてゐるらしか

つた。靜かな夜である。私はふと菜園の野菜のことを思つた。土の懷の中に温かく細かな雨にうるほつて、互に囁き合つてゐる野菜のむれを思ひうかべるのであつた。

日常生活

私は春の七草の中のはとけのざを知らなかつた。勿論いろいろな植物學の本で、その繪だけは度々見てゐたのであるが、どうしても實物を見當てることが出來なかつた。それでこの邊にははとけのざはないのだと思つてゐた。

それをはしなくも今日農場の隅の石垣の間で見いだしたのである。小さい匙のやうな葉を並べて、その上に瑠璃色の美しい小さな花をつけてなよなよと咲いてゐるのを見たとき私は堪らなく嬉しかつた、久しい間思ひつめてゐた未見の友に逢つたやうに……。

私は呻にその一株をぬきとつて、もつて歸つて家の庭に鉢植にして置いたのであつた。

□
夜、私は或る友達が、私を甚しく侮辱したので、私は勇しく決闘をいどんだ夢を見た、目さめると私はその恐ろしさにひとり身をふるはせた。實に恐ろしい決闘だつたので……………。

私はよくかかる原始的な暴虐な夢を見ることがあるが、そのとき私は私の心の中に残されてある「悪」そのものを明らかに見せつけられるやうな気がするのである。そして我自身を恐れるやうな氣持を抱いて身を慄はすのである。

私はひとり寢床の中に慄つてゐた。
でも電燈の明るく光つてゐるのは、この際何にも増して氣づよい感じを抱かせるものであつた。

□
雨が銀の絲でも延べるやうに降つてゐる。實に静かな日だ、森の緑り葉は雨に濡れて目覺めるやうに美しかつた。

私はしばしその美しい葉の色に見とれてゐた。

その時、ふと私はこの森にゐる蟬のことを思ひ出すのだつた。毎日々々朝から晩まで、やかましく鳴きたててゐた蟬が、今日に限つて黙つてゐるのに氣がついたのである。

私は濡れた木肌を見ながら……………その濡れた木肌にしつかりつかまつて、あのかたびらのやうな羽をぬらしながら、幾つと聲をひそめてゐるさびしい蟬の様子を思つて、たまらない淋しさを心にしみ渡らせてゐるのだつた。

□
朝刈つて來た草を、正午に秣切にかけて切るのが私の夏の日課の一つである。

日中になると厩の中はむせ返るほどの暑さである。その暑さの中で私は肌ぬぎになつてゐて、秣を切るのである。がつちやん、がつちやん。

切つて行く中に汗が止め度なく流れだして来る。胸のあたりから、背にかけて一ぱいに玉の汗が流れる。その玉の汗が出るがままに、拭きもしないで切つて行く、生草を切つては、麥稈を切る、麥稈を切るときには濛々と白い塵が立ち上る。

可なり苦しい仕事だ。だのに私は私の身體全體が力で一ぱいになつて易々と仕おほすことが出来る。仕事をつゞけて行く中に、力は限りなく湧きだして来る。私は何時までも切りつゞけて行くのであつた。

切り終ると直ぐ裏の小川で水浴をするのである。

□

夕方秣切をしようと思つて厩に行く、山のやうに切つてある秣を、そ、う、きに入れて、サツと半切桶の中にうつす。そして汲んで来た水をその上に瀉いで、両手で掻き混ぜ

る。何遍も何遍もませかえしてから、それを一々駄桶の中に入れて、三つの厩の中に入れて、途端！牛の駄桶の中で何か玉のやうに光つたものがある。

「何か知ら」私はさう思つて、その光つたところを、一寸手で掻いて見たが何ももない。「慥かこの邊だつたが……」と思つてしばらく見詰めてゐると、やがてぴかりと光つて来た。螢なのである。

おや……この螢は……さうすると今朝刈つて来た草の中に居たのだな……そしてこの秣切臺の齒をくゞつて、この半切桶の中で揉みに揉まれて……さうして尙生きてゐたのだな……幸福な螢よ。私は秣に汚れた掌の上にのせて、そつとその側の草の上に置いてやつた。

□

小さい瑠璃羽かくしが、美しい電燈の光をしたつて来て、そのま白い笠にとまつた。小さい尻を上げたり、美しい觸角をふつたりする。幾度か白い笠の上を往き來し

てゐる。やがて琥珀色の長さ一分ばかりの鞘の中から、美しい練絹のやうな白い羽をあらはしたかと思ふと、バツバツとその電燈の周囲を飛び廻る。そしてやがて又電燈の笠にとまる。とまるとその美しい羽を鞘の中に静かにたたみ込んでしまふ。

瑠璃と珊瑚で鑲めたやうな蟲——さうしてあの白絹のやうな軟かい羽……五分にも足りないこの蟲の身體にも、かうも美しいものが完全に備はつてゐるかと思ふ私は一種讚嘆の心を起さずには居られなかつた。ああそれにしても自然は何といふ美しいものを多く包蔵してゐることであらう。

□

夜、私が原稿を書いてゐると、その原稿紙の上に、一匹のけらがとんで來た。私はこの蟲の異様な姿と、あはたゞしい動作と、さうして害蟲だと云ふ考が先にたつて、私はすぐそこにあつた鉛筆をとつて、その軸でほんの一打した。

と、それがうまくけらの頭にあたつて、けらはその儘ころつと仰向になつて、空

を掴んでもがき初めた。そしてしばらくするとそのけらは、次第々に弱つてしまつたやうに、足先を痙攣させてゐたが、やがて完全に死んでしまつた。

私は不快な心持になつて見てゐたが、それが死にきつてしまふと、やがてたまらなくなつて、ふいと後の暗闇の中になげすめてしまつた。

それから間もなく、又一匹のけらが飛んで來た。それはさつき私が殺したけらの夫婦の片つぽであらうと思つた。そして私が何げなくなしたこの仕打が、このけらに實に悲しい運命を與へたことになつたことを、實にすまなく思ふのであつた。

私はそのかさかさと走つて行くけらを涙の眼で見つめてゐるのであつた。

□

自然の居るところは清らかである。

人の居るところは、汚らはしいものになつてゐる。

私は野の小徑や、野の草の上を素足で歩むことを好むが、村中を素足で歩くほどい

やなことはない。

田舎の罪人はみんな都會に流れ込んで行く、都會はそれを平氣で生かしてゐる。

七月十三日の正午前から、不意に大暴風雨となつた。雨は小石を投げつけるやうに降りしきつてゐた。その時一群の雀が風と戦ひながら運動場の隅までとんで來た。その時思ひ切り強い風が東北から吹きかかつて來た。とその一群の雀は、小石を投げ込むやうに田水の中に投げ込まれてしまつた。雀は面喰つてしまつて、水田の中で狂つてゐたが、それでも風の風ぎ間にやつと、水に濡れた身體を學校用の肋木にとつつかまつた。だが風はきびしく吹いて來るので、そのまますくんだやうになつて、一生懸命でとつつかまつてゐる。

と學校の小使がそれを見つけて、雨の中に飛びだした。片端からつかまへてやらうとしてである。雀はその恐しい手の迫つて來るのを知らないのか、それとも知つてゐても、逃げる事が出來ないのか、凝つとして身をすくめてゐる。その中に小使は丁度豆でもひろつてゐるやうに掴まへて行つた。そして六羽の雀を生捕つたのであつた。

私が妻木の青年會場で、村人のために講演をして居ると、そのすぐ窓の下で、六つばかりの子供が大きな聲で泣きだした。そしてそれが私の講演には邪魔になることが夥しかった。そこで私は

「泣いてはいけないぞ」

かう云つて、その兒の方を一寸見た。

さうすると今迄火のつくやうに泣き叫んでゐた子供は、そのままぱつたり泣き止んだ、そしてやがてもちつと彼方へ歩いて行くのであつた。つまり私が洋服といふ異様

な着物をきて、髪を生やして可なり恐ろしさうな顔付をしてゐるのに、一種の恐怖を抱いて、かく泣き止んだのであらう。

私は「よい子だね、泣くのを止めたね……！」と云つて、その子をほめたものの、實にこの兒に對してすまない氣がしたのであつた。

悲しいことがあつて泣いてゐるのに「泣いてはいけないぞ！」と云ふやうな簡單な言葉で、その泣くのをやめさせてしまつたのである。私は實にこの行爲を恥しく思つたのである。そしてこのままこの講演がよされるのであつたら、よしてしまつて何處かにかくれてゐたいと思つた。

□

大根の芽がたくさん出たので間引いた。

間引いて行く中に、その播溝にころげてゐた大きな土塊が、その纖弱な芽の力によつて、ぐつと持ち上げられてゐるのを見た、そして芽生えの伸び行く力の偉大さをし

み／＼感じたことであつた。

あゝ「伸んで行く」と云ふ尊い力よ、大きな力よ！

□

上萬神社跡の大木が、毎日伐り倒されて行くのが、私にはこの上もなく痛々しく思はれる。

晴れた秋の空に高く響く倒木の音を聞いてゐると、何とも云へない痛々しい、そして悲しい感じをそそる。

それは古木存置とか、古蹟保存とか云ふ觀念から來る悲哀よりも、長い間幸福な生活をつゞけてゐたものが、一時に倒されて行く一種の革命的氣分の悲しみが起つたのである。私はぞつと慄へた。

それから二三日たつた日の晩方、他出先から歸つて見ると、もうこの森の木は、七八本ばかり取り残されてゐるだけであつた。その残された木とても、枝を折られたり

樹皮をはがされたりして、まことに痛々しい、そして淋しいものだった。
私は暗くなつて行く夕暮の空に、この取残された七八本の古木の運命を眺めて、撫
然たるものがあつた。

□

私は今、夜行列車に乗つて姫路から岡山に向つてゐる。

外は眞暗だ！その暗闇の中を列車はすさまじい勢で進んで行く、何か暗い大地の底
へでも、もぐり込んで行くやうだ。

夜が更けるにしたがつて、列車の中の旅客は疲れたやうに、ぐつたりとなつて眠り
に落ちて行つた。その眠りにおちた人達を白い電燈が照らしてゐた。その中に私は半
眠半醒の状態におちかかつてゐた。

と私は何かすがすがしい響を耳の底に聞いた。

私はその時、目覚めるやうな氣持になつて、その響を聞かうとした。汽車は轟々の

響をたて、進行をつゞけてゐる。その響をついて實に研え切つた爽々しい音が聞えて
来る。

ちんちろりん、ちんちろりん……………

金の環でも投げてゐるやうな小さなひびき……………それがこのすさまじい響をとほして
聞えて来るのである。もう聞かれないだらうかと思つてゐると、又ひびいて来る。

窓の外をすかして見ると、外はひろくとした草深かい野原であるらしい。

ちんちろりん、ちんちろりん……………

又そのひびきが聞えて来る。

私は窓をおしひらいて、草深い野原をながめた……………。遠くで青い電燈の灯が一つ見
とめられた。

□

ほのかにも月はてらせどどこよりかま白き雪の閃めきて降るも

冬の夜の汽車を降り来て山道を古里へ行けば寒さ身にしむ
ひしひしと氷をふみて歸り行く跣足のわれに雪はふりつつ
かさこそと落葉の上になしろなく霰ころげて夜のかそけき
ましろなる月はてらせり冬の夜の竹のほぬれの静けくもあるか
ま白なる山をくまどりほの赤く空の見ゆるはあはれ火事かも
ややありて空のあかみもあせ行きぬそのあとはたゞ雪の降るなり
川ぞひの簾の下道行きおれば妻が夜機の梭の音する。

□

はるばると目路のかぎりの白雪の上をつつめる空は青しも
ましろなる雪の大地をおほらかに大日輪は輝きて照る

□

ささらぎのつもこりの朝の静かなる麥田の上を雲雀なき居る

如月の空さむければ麥の田の畦に身をよせ雲雀なきをる
しろじろと雪はつもれど静やかに空晴れたれば雲雀鳴きいづ
すこやかに目ざめてあれば今日もまた働けよとや雲雀鳴きをる
目さむれば寢屋の灯のしづけさに雲雀なけるは夜のあけぬらし

新米

十月十七日、神嘗祭の日、郷里の父から一通の手紙と共に、菰包にされた荷物が届いた。私は早速その手紙を読んで、菰包のものはお米であることを知った。

私はすぐ縄を切つて、包みを解いて見ると、古い餛飩箱が現はれ蓋をあけるとその中には水晶のやうに精白された新米が一ぱい詰められてゐるのであつた。蓋を開けたとき、その美しいお米がばらばらとこぼれ出た。お米の外に新しい香のまだ去らない

干瓢の一包もあつた。

私は蓋をあけたまま、しばらくは何とも云へぬ有難さに、涙を身中に一ぱい漲らせて、凝つとそれを眺めてゐるのであつた。

私はここ二月ばかり家の方へかへることが出来なないのである。郷里の方にひどく窒扶斯が流行するのでよりつけないのである。家のものは皆無事で暮してゐるもの、かうして一人遠く離れて居ることは、何とも云へぬ不安な、そして淋しいものであつた。たゞ私は家からの便りを樂みとして暮してゐるより外はなかつた。さうした今の私にとつては、この一箱のお米も、むしろ、嬉し、うれ、しいものであつたのである。私はしばらくそれを見詰めたまま、嬉し涙に心を濡らしてゐるのだつた。

本當にこのお米の一粒一粒にも、家のものの心がよくあらはれてゐるのである。自分の土地の上で、自分達が手を下して作つたお米を、自分の家の水車で精白して、自分で荷造りして、遠いこの土地まで送つてくれた……その心……その辛苦と

その愛情とを思ふと、私はただ、嬉しさで心が一ぱいになつて「有難い有難い……」斯う心の中に繰り返すより外はなかつた。

手紙によると、患者があるので、川の水はすっかり引落してしまつてゐるので、水車を使ふことが出来なかつたが、幸ひこの間の降雨に少し水が出たので、やつと片白でつくことが出来た——といつてある。まぬるく廻るあの谷川の水車で、母と妻とが氣長について呉れたのであらう。それにこれほどまでに美しく精白されてゐること、皆の心づくしの程が思はれて私はもう嬉しさと有難さとで心が一ぱいになつてゐるのであつた。

「本當に有難いことだ」私はさう呟きながら、その邊にこぼれてゐる米の一粒一粒を叮嚀に拾ひとつて箱の中に入れた。本當にこのお米の一粒にも尊い心が含まれてゐるのである。

かうした尊い心の結晶したこの新しいお米を食べるといふことは、私にとつてはこ

の上もない幸福なことであらねばならない。

私はすぐ父にあてて手紙を書いた。嬉しい心のありたけをあらはして手紙を書いたのである。味よりも親の心よ今年米——本當に有難いことだ。

さあ今夜はその有難い新米が戴けるのである。うれしいことだ、しかしそのお米の味も味だが、父の心、母の心、妻の心……、

お父さん！

お母さん！

さうして我が愛する妻よ！

お米の味よりも、あなた方の心持を味ふことが、よりよく尊いことに思はれます。私は夕食の膳に向つて箸をとるとき、親の辛苦と厚意に對して……さうしてかゝる恵みを與へて下さつた神様に對して、深い／＼感謝を捧げたのであつた。

私は芳ばしい新米の香の中に、家にゐる三人の姿を思ひ浮べながら、箸をうごかす

のであつた。

恐ろしい「モリ」の話

むかしむかし或る山奥に貧乏なお寺がありました、このお寺の和尚さんは大層牛がすきで、庫裏のすぐ側の軒下に粗末な板圍ひをして、それに一匹の犢を飼つてゐました、そして朝晩それを出しては、川入をさせたり毛を刷いてやつたりして、大層可愛がつてゐました。

或夜のことでありました——その夜は雨が肅々とふつて四邊は鼻をつまゝれても分らない程眞暗でありました。一人の伯樂は和尚さんが大層よい犢をもつてゐることをきいて、それを盗みだそうと思つて軒下にかくれてゐました。厩の中には一匹の肉に飢た狼が、これも又犢を狙つて藁の影にひそんでゐるのです。そしてどちらとも和尚さんの寝こむのばかりを待つて居りました。

それとも知らない和尚さんは行燈の火を掻き立て、丹念に修證義を書きうつして居ました。その傍で姨さんは縫ものをしてゐました。

夜が次第々々に更けて行くにつれて雨はいよ／＼はげしく降りだしました。そして軒端にかくれてゐる伯樂の着物にも細かい濕吹のかゝるのが感ぜられました。狼の黄色な毛の尖端にも仄かな濕りが感じられるまでに四邊の空氣はしめつて參りました。遠くの方でゴロゴロと雷さえ鳴り響きます。「何といふ大きな雨になつたらうな」和尚さんは老眼鏡をぴかりと光らせて姨さんを顧りみられる。

「ほんとでござんすな、また漏が來ねばよいでござんすがね」

と一寸針をやめて和尚さんの方を見る。不安な心持が眉の間に漂うてゐる。

やがて庫裏の天井板にぼつんといふ音がしました。破れた庫裏の屋根が漏りだしたのである。聽てその音は續けさまになり出した。あちらの隅でも又ぼつりぼつりと音がしだした。

和尚さんは手燭に火をつけて本堂へたちました。暗い本堂ではしめつばい抹香のほひがして蝕んだ床板に足の裏が冷たく感じられた。雨漏はこゝにもしてゐた。ぼつりぼつり淋しい音をたて、雨水はあたりに飛沫をちらして板間の上には地圖でもかいたやうに水が流れてゐます。

雨がはげしくなるにつれて、雨もりはいよいよはげしくなりました。和尚さんは姨さんに盥をもたせるやら井をもたせるやらして大騒ぎをして居ります。

「虎狼よりもりが恐ろしい」虎狼よりもモリが一番恐ろしい
かういひながら和尚さんは、あちらこちら騒ぎまわつて居ります。

それを聞いた狼はかう思ひました。世の中には俺より強いものはない俺より恐いものはないと思つて居るのに、今和尚さんの云ふのを聞くと、俺よりも強い俺よりも恐いモリといふものが居るらしい。このまゝかうして居ると俺もその恐いモリのためにいぢめられるのではあるまいか、それこそ大變だ、一刻も早く逃げるにこした

ことはない——かう思ふともう恐しくて恐しくて一時も凝つとして居られなくなりま
した。で今迄藁のかけに潜んでゐた狼はそうと音のせないやうに立つたが早いか、矢
庭に外にかけだしました。暗の中を走り出した黒い影を見た伯樂は「おや憤が駈け出
した」と思ひました。でいきなりその黒い影にとつ掴まつてひらりとその背の上に飛
び乗りました。

狼は「それ俺の背の上にモリが飛び乗つた」と思つて膽をどぎつとさせました。も
うたまらない、甚麼に飛んでも跳ても背の上のモリは確然ととつ掴まつてゐます。ど
うすることも出来ませんので、たゞ脚をぶるぶる慄はせながらそれでもやはり自分の
住みなれてゐる山奥に入るより外はありませんでした、山奥には狼の住む穴がありま
した。狼はそこに無意識に走りこみました。そして脚を止めると背のモリはそこにそ
ろりとおりました。狼は

「これは助つた！」

と思ひました。そして矢庭に穴の外に飛び出して大きな聲で他の獸をよびました。
その聲は暗い奥山の隅々までもよく響き渡りました。

狼の召集をうけて、いろ／＼な獸は一齐に集まりました、虎も來ました。狸も來ま
した、狐も來ました、兎も來ました、猿も來ました、やがて皆が集ると獸の會議がひ
らかれます。

狼は澤山の獸を自分の前に集めて、今夜の恐しかった出來事を一部始終表情を交へ
ながら語りました、そして最後にその恐ろしい「モリ」がこの穴の中に居ることを告
げ「さて皆さん！どうしたらよいでせう？」と相談をかけました。

聲に應じて立つたのは狐でありました。

「それはわけはないではないか皆が、りでこの穴をうづめてしまつてやらう」と如
何にも高慢な態度を見せながら云ひました。

みんなは「流石に人間でもばかすほどの狐君だ、えらいものだ」とその企圖に感心

しました。然しその中にゐた一匹の白兎はそれはいけぬと白い長い耳をふり立てながら申しました。

「然しその穴をうづめることになる、とても我々が十日や二十日かゝつても出来る仕事ではあるまい。」

そうすると、又虎が口を開きました。

「その穴をうづめるとしても、その時「モリ」がとびだして來たら諸君はどうします！」と虎にも似合はないことを申します。その中あれやこれやの議論が出ましたが、

「兎に角モリが居るか居ないか調べてからのことにしよう」と云ふことになりました。そしてそれは集つた獸の中で尾の一番長いものが、その尾を穴の中に入れてませて見ることになりました。その時尾の一番長がかったのは猿でした。「では猿さん、お前さんはこの穴の中に尾を入れてませて見てくれ、尾のさきに「モリ」が一寸でも觸つた

ら居るんだから………」

皆んながかう云ひました。

猿は恐ろしくて恐ろしくてたまりませんが、みんなの評議の結果だからいたし方が有りません。懸て皆の云ふどほり穴の縁の冬青の木に取り掛まつて尾を穴の中に入れてませくりました。穴の中ではモリが猿の尾をしつかりつかみました。

「おやモリが俺の尾をつかんでしまつた、助けてくれ助けてくれ！」猿は大聲でわめきました。だが皆は恐ろしいのと猿の日常の老獪な行爲を憎んでゐたので一齊に山の奥に逃げこんでしまひました。

猿はひとり残されて、穴の側の冬青の木を唯一のたよりに力一ばいだして赤い顔をしてがんばつてゐました。

だがどうしてもモリは尾をはなしません、ともすると穴の中に引つ張りこまれさうになります、そこで猿は渾身の力をこめて「ウーン」と氣張りますと、これは又猿の尾

はその根本からぼつとりと切れてしまひました。

猿は痛くて仕方ありませんが、それでも恐ろしくてたまりませんので、痛さを忍んで一生懸命山奥へ駆こんでしまひました。

それで今でも猿はあんなに尾が短くそして顔が赤いのださうでございます。

我が「發表」は我が生命の飛躍である

一

私はこれまで筆に口に可なり多く發表して來たやうに思ひます。これについて私は或は周圍の人々から、あまり出しやばかり過ぎるやうに思はれはしまいかとさへ思ふこともあつたのですが、しかし私の發表は私にとつては實に眞剣な仕事で、私を純正に育て伸ばしてくれる一つの方便であるといふ確實をもつてゐましたので矢張りそれを續けて來たのであります。勿論私の發表は拙いものであります。けれども眞實に

自己を生かそうとする私の眞心から誕生する發表であるならばそこに自己を生長させる何物かを含んでゐると思つて私は憶するところなく發表しました。

二

人は誰れしもその胸の中には、自己を正し生かし育てやうとする血潮を漲らせて居る筈である。私の胸にもこの血潮は可なりの強さをもつて高鳴つてゐたのであります。これはやがて私にとつては「自己凝視」となり「内面省察」となつてあらはれて來たのであります。或場合には心ゆくばかりこの生の伸長を味ふやうな生活の高潮を感じたこともありませうし、又或場合にはこの生の貧しさ醜さに心から泣かせられたこともありませうが、その場合私は何時も何物かを掴まずには居ませんでした。例へば教壇上に自己の生の思ふまゝなる飛躍を感じたとき、私は更によりよき自己への憧憬と、それに對する資料をもつのであります。又或る時は運命の十字路に立ちて本當の敬虔な宗教的信念を湧かせ、そこに力強い何物かを體感したこともありました。

又或時は私の日常生活から自己の貧しい姿を切實に見せつけられて、果ては堪え切れない心になつて霎時頭をかゝえて悲觀することもありました。そしてそれが何時か哲學上の問題に移つて來たこともあります。かくの如くにして私の日常の生活には、倫理があり、哲學があり、藝術があり、教育があるのであります。その度毎に私はその問題を解決すべく悶える、私の生の核子はこゝに芽生いたします。

發表はこの芽生からくる一つの果實であります。

三

自己誇示のための發表——それは自己を欺き、他を欺く一種の罪惡であらねばなりません。純真なる自己を育み、向上の一路を辿つてゐるものにとつては、これは堪え得ない罪惡であります。發表そのことの中にも、眞實な自己が生長して行くのでなかつたら、發表の價値は全然認めることは出來ないのであります。

或人は云ふ一つの研究が出來たならば、それを凝つと胸に抱いて黙つて居ればいゝ

ではないか、何も發表する必要はないのではないか？」と沈黙の美しさ——それについて私は考えて見ないこともない。しかし修養の道途にある私達にとつては、とてもこの道は守り得ないことであつた。今の人に松葉で生ける仙人の修業を強ひると同じものだと思はれるのであります。發表は人の魂をそだてる一種の食物です。

私は自己の表現に向つて進まずには居られませんでした。

私は師範學校に居るときは、人の前に出て話しなどすることは一番嫌な方でありました。たまに人の前などに出されると赤い顔をして胸の動悸をうたせたものであります。何等の頃かこの惨めな私を目の前に思ひ浮べては一種の悲哀を胸に抱くのでした。そして奮然決するところがありました。そしてなるべく多くの壇上に立つやうに自ら努めたのであります。壇上に立つ前、壇上に立つた時の私は常に眞實な何物かを掴むのであります。この中に私は人としての膽力を鍛えることの出來た外にいろいろな修養の資料を得たことを思ひだすことが出來ます。

雑誌に發表する原稿についても苦心を重ねて來ました。その苦心の中に私は私自身のよく育つて來たことが思ひ浮べられます。苦心になつた研究物が紙屑籠に葬られたこともあります。この苦心の中に云ふべからざる修養の契機があります。

私は研究を發表した時、つとめて先輩や友人の批評を求めました。そこにも私が修養するためにはいゝ資料が得られました。眞實な氣分が常に漲つて居る筈であり、それを受ける人にとつて更により以上の價値を表すものであることは云ふまでもないことと思ひます。雑誌などに私の研究が現れるとき、私の研究に共鳴して千里を遠しとせず、わざわざその研究物の批評やら感想をかいてくれる人などがあるが、こんな時には心からの愉快を感じると同時に、又一つの強い暗示を受けるものであります。

四

常によりよき生活を求めて止まないものにとつては、一時でも沈滞するといふことは甚しき苦痛であらねばならぬ。

常に自己の力によつて新しき生活を開拓すること——創造的生活を絶えず續けて行くこと、生の飛躍から生の飛躍へと進み行くこと——これが本當に生きて行かうとするものゝ根本な欲求であらねばならぬ。而してその生の開拓——創造——飛躍といふことは常にその環境から何物かを擱んで、それを誠實に自化して行くことである。つまり(一)何物かを擱む(問題發見)(二)自我化(研究、發表)の二つが螺旋的に循環して向上して行くことを指すのであります。

私にとつて「發表」は自我の生命の開拓であり、創造であり飛躍である。

又私にとつて「發表」はその時の自我の決算報告であり、更に第二の自我の誕生する呱呱の聲でもある。

沈黙の美しさは發表過程を通過したものによつて本當に表はされる。而して沈黙といふことが又よりよき「發表」となるのであります。

研究教授の後に

皆さんが私のつまらない教授をも熱心に見て下さつたことを、私は心から感謝いたします。私はあの教授に對して、私の常にもつてゐる考をのべさせて戴いて、それから皆さんの御研究を仰ぎたいと思ふのであります。

私は教授に對して、常にかう云ふ考をもつてゐるのであります。それは教授には、その人の個性が生きて働らかねばならないことです。教授と個性とが密着してゐなければならぬことです。私はあの教授法の書物の上で、定められてゐる教授の一般形式からぬけだして、獨一な方法を、自分で作り出したいと思ふのであります。私はこれまで可なり多くの教授を參觀してゐるのでありますが、どうも一般に生氣がないやうに感じます。それは教授が教授法のための教授となり、何時とはなしに類型的なものになつて、教授に個性が生かされてゐないからだと思ひます。

教授に個性を生かすといふことには、二つの方面があるやうに思はれます。それは教授をもつて一つの創作と見、教授の上に自己の色彩を濃やかに織りだして、獨特な教授の方法をつくりだすのであります。今一つはかく教授に個性を發揮することによりて、自己を煉成して行かうとするのであります。前者が教授の効果を大ならしめようとするものであるならば、後者は教授によりて自己を實現しようとするのであります。

凡そ我々は小さいながらも、神から宇宙の特殊な一小部分を託されてゐるのであります。私の立つてゐる所、私の仕てゐる仕事——これは私のみの特有のものであります。私のもつてゐる経験、知識は、世界の何人もが曾て経験しなかつたもので、現在に於ても、又未來に於ても、誰も経験することの出来ないものであります。勿論我々の生活には多くの類似的共通の部面をもつものであるけれども、慥かにかゝした點が多くあるのであります。そしてそれが著しく貴重なものであり、高價な點であるの

でございます。かかる點から考へまして、私は眞に仕事に個性を生かさねばならぬと思ふのであります。

創作とはつまりこの純なる個性の發表をいふのであります。

武者小路實篤氏は「注意を一點に集めて、材料をなるべく高價に生々とはり出す努力が創作だ」といつて居られるが、かかる見地からすると教授も一種の創作であると思はれます。例へば畫家は、自然や人物を描くに、その事象の内部に潜んでゐる本性を直感し、それを畫面の上に色や光線の工合によつて現します。教師はこれと同じく教材といふ特殊な資料をもつて、兒童の心のキャンパスの上に、或る物の象を描く畫家であるのでございます。創作といふ點に於ては聊かも變りはないと思ひます。畫家はその集められたる意を、最も高價に生々と出すことが、出来れば出来るほど、人の感興を深からしめると同じやうに、教師の生命（個性）が生々として働くことが出来れば出来るほど、兒童の感銘も強いのであります。随つて教授の効果がよりよくなるのであります。

であります。

かうしてかかる部面に努力して行くなれば、それが同時に自己實現となつてゐるのであります。かの畫家の仕事は、或る物象をキャンパスの上に具現することであると共に、一方作品そのものに、自己の生命を一步一步、より深く進めて行くのであります。が、それと同じやうに、教師も自己の教授に努力し、そこに個性を生かすことによつて、自己の生命をより高く導くことが出来るのであります。

教授は實に與へることであるばかりではなく、得ることである。而して教師の努力が深刻になればなるほど外に現れる効果も著しく、又内に孕む力も大きくなるのであります。

作家の作品に、個性が生きてゐることが、作品の價值そのものにも、作家の人格そのものにも尊いものがあるやうに、教授の上に個性が生きて、教師の人格が潑瀾として輝いてゐることは、この上もない尊いことであらねばなりません。

かかる意味から私は單に巧みな教授をすることよりも、先づ眞實に個性の生かされた教授をすることが、何の位尊いか知れぬと思ふのであります。今日私のした教授は、至らぬものではありましたが、幾等かさうした意味に於て特色づけてゐる考へであります。

或人がドストエフスキの作品を評して「天下此位拙い文章を見たことがない。しかし天下此位力強い作品はなからう」といつてゐるが、それはこの作品に表れてゐる力強い個性の響きに共鳴した言葉であり、一面ドストエフスキの偉大なる藝術的人格を物語るものであります。

私が口先でものを云つてゐるやうな徂徠の文章などよりも、腹のドン底から絞り出すやうな日蓮の文章を好む所以もここにあるのでございます。

私は教授に對して、叙上のやうな考をもつてゐますから、私の教法は教材により、兒童により、場所により、時により、各々異なる所があるのであります。かくして私

は永久に教授に自己の個性を生かさうとするのであります。そしてその上に自分をも生かさうとするのであります。

見ていただいた教授は、かうした考の下に進んでゐる私の生の一断面であります。どうか皆さんの御批正を仰ぎたいものと思ひます。さうしてこの不完全な私を進めるための資料を御與へ下さいますやう偏に願上げる次第であります。

植物改良王ルーサー、バアバング

眞の我々の智慧を開いてくれるものは何か。それは云ふまでもなく自然である。自然は哲學に對しても、科學に對しても、藝術に對しても、宗教に對しても、その素地となり、根源となつてゐる。心を靜かにしてこの自然とまともに顔を合せて見るがよい。さうすれば我々は汲んでも汲んでも汲み切れないものの、あまりに多きに驚くであらう。

文化は人間の創造だ——といふが、これは身の程を知らないものの言葉である。

此の人間にはただ自然と面接して、その中から知り得たものを現はす以外には出来ないので。文化とは、つまり自然の中に含まれてゐる眞、善、美、聖てふ價值體を捕へて、それを具體化する獵人によつて築き上げられるものと思はれるのである。

植物改良王ルーサー・バアバングの如きは、蓋しこの自然の眞理に對する勇敢なる獵人であつたのである。彼は學者ではない。一介の勞働者に過ぎなかつた。しかし自然の林の中を奥へ奥へと進んで、遂にその奥に隠れ潜んでゐる眞理を捉へ得たのである。彼ほど自然をまともに見、さうして眞實に考へたものはなからう。ロダンは自然の藝術に生きた偉人であるが、彼は自然の科學に生きた巨人である。いかなる平凡な手が一たび植物に加はると、醜きものは美しきものとなり、悪しきものは良きものとなり……美しき花卉、佳良なる果實は思ふがまゝに獲られるのである。而して彼は

云つてゐる——「植物や花について仕事をする時に、私は、作り出したいと思つてゐる事次第で、色を加へたり、形をかへたり、大きさを、香をもつて來たりする。この仕事は自然の教へに従つてする。その偉大な力これだけを私は考へる」と。彼はまことに自然の科學者である。

ルーサーバアバングは、一千八百四十九年三月七日。亞米利加合衆國マサチューセツト州のランカスターに生れた。小學校を卒業すると、直に或る工場に送られて、工場勞働に従はねばならないほどの貧家に生を稟けたのであつた。小學校の時代から、頗る熱心に植物に對して趣味をもつて研究してゐたので、工場に入つても閑暇を見いだしては、植物學の書籍を借りて讀みあさつた。次でニュウイングランドの某農場に入つて稼ぐことになつたが、この間専心馬鈴薯と葡萄との改良にしたがつたを遂に一種高尚な香氣をもつた多産なる馬鈴薯を作り出すことに成功した。是れ西曆一千八百七十五年の夏のこと、氏が恰も二十六歳の時であつたのである。この新品種の作

出せられたことを聞くと、各地の種苗商は競つて之を求めようとした。この種は即ち「バアバングスシードリング」と稱せられて、現に日本にも來てゐるものである。この種の販賣權を得た種苗商グレゴリーは實に百二十五萬弗の巨額の金をバアバングに提供したのであつた。以つてこの種が如何に優良であるかを知ることが出来るのであらう。米國ではこの種の出現によつて毎年二百萬弗の増収がなし得られるといふことである驚くべき品種改良の結果ではないか。

彼は其後、加州の北部海岸に近きサンタ、ローザに移住した。こゝは氣候が溫暖多雨であつて、植物の成育には最も適した土地である。彼はここで一生の事業を完成しようと思ひ立つたのである。そこで僅かな地面を借り受けて、自分の實驗を初めだした。しかし彼はここで思ふまゝその實驗に没頭してゐるわけにはゆかない。矢張り彼は口を糊することを考へなければならなかつた。で他人の農場に入つて、汗をたらして働らいては、その日その日の生計を立てたのである。一千八百八十八年、彼がこゝ

に移つてから十三年目のことである。彼の身體から絞り出された膏血は、やや纏つた黄金となつて積つたのである。それをもつてここに新なる土地を購入した。そしてここで全世界の植物を集めて、大規模の選擇淘汰を初めたのである。全面積九町餘歩の試験場。そこにはいろいろな植物が生育して、各その個性を競つてゐるのである。— その中で今や七十三歳のバアバングは、白鬚を撫しながら、靜かにそれ等の植物に親しんでゐるのである。

自然が生む所の植物を靜かに凝視しては、又靜かに考へる。さうしてその中に本當に植物を伸ばし育てる道を見出すのである。自然を視、自然を考へる——それがバアバングの仕事の全部だと云つてよい。そして其の結果は新品種となりこの地上に幾多の驚異として齎したのである。種なし苹果、大枇杷、交配胡桃、馬鈴薯とトマトの雜種ホマト、美しいバアバングスカンナや、シヤスタージェイ、無棘懸釣子、無棘仙人掌、核無梅、核無葡萄、……等その他多くの珍しい品種が作品せられた

のである。それ等の中で最も苦心して育成せられたのは、無棘仙人掌である。野生の有棘仙人掌をとり來つて、何百回とも知れない程の交配を重ねた。さうして遂にこの無棘仙人掌を作り出したのである。實に量るべからざる忍耐と、苦心とを要してゐるけれども彼は少しも疲れなかつた。確固たる彼の信念する前途には、新生の喜びが輝いてゐた。彼は一步一步確實なる道を自覺しながら、靜かに進んで行つて、遂にその彼岸に到着するを得た。而してその豫期されてゐた事實が實現すると、彼は云つた。

『この無棘仙人掌こそは、地上人類にとつての福音である。質が多肉で滋養が多くて、家畜の飼料たるは勿論、人間の食料となすことが出来るが故に、この地上の人間が、今の二倍になつても何等困難を感じない』と又曰く『この仙人掌を栽培することは世界の不毛の沙漠を變じて沃野となすことである』とバアバングの得意思ふべしである。

かくしてバアバングの名は、園藝界の魔術王、植物改良王といふ異稱と共に世界に鳴り渡つた。和蘭の遺傳學者ドフリース氏はこの聲名を慕つて遙々海をこえて、この試験場を訪れ、その規模の大なると、氏の熱心なる努力とに驚歎したといふことである。歐洲の植物學者、遺傳學者は必らずここを訪れて、バアバングの教を乞ふのである。

或時、彼は作物の交配に熱中してゐた。その時、同じ米國の巨人ルーズベルト氏は氏の聲名を慕つてわざ／＼訪れたのであつた。が、その時彼は交配に熱中してゐた。彼はその名刺を見て、一寸考へたが『今交配作業中だから、一寸お待ち下さるやう云つて置いてくれ……』さう助手に云ひつけて、又作業を續けた。デリケートな植物の生命に觸れてゐる彼のこの數分の時は、實に何物にもかえ得ない尊いものがあつたのであらう、その中にルーズベルトは旅程の都合によつて、そこを辭せなければならなかつた。そして遂にバアバングは、この遠來の賓客に接することが出来なかつた。

彼は實に熱誠の人であつた。一度その精力が集注されると、他の何物をも忘れてしまふ程の人であつたのである。その熱誠が彼の現在をつくりだしたと云つてもよからう。

彼の著述に「果實及花卉の新種」(一千八百九十三年版)「人間植物の仕込み」(一千九百九十九年版)等がある。就中「人間植物の仕込み」は彼の面目をそのまま、羅如たらしめた好著である。その中の輝きのある寶玉のやうな句を二三摘記して見よう。

x
自然に近ければ、近いだけいい。

x
子供は磨きあげたダイヤモンドのやうだ。そのたくさんの面は、鋭いはずきりした印象をうけてゐる。これは小石には出来ないことだ。

x
植物をうまく作るには、しんから正直でなければならぬ、私はこの事を空想的な云ひ方をしてゐるのではない、いちばん實際的な、そのまゝなこととして、言つてゐるのである。どんな場合でも、自然に知れずに、又その結果が、自分自身の頭の上に歸つて來ることなしに、自然をだまさうとしたり、自然に逆つたり、自然に不正直だつたりすることは出来ないのだ。

x
子供は地獄の恐怖で、よりよくなつたことも、より氣高くなつたこともない。ほんたうの釣合のとれた、いいたべものを、豊富にもつてゐる善い正しい生活の教訓を、自然から子供に教へておもらひなさい。

勿論この断片では、バアバングのこの名著の片影をも知ることは出来ないが、しかしバアバングの人間としての一面を知ることには出来よう。

植物改良王、バアバング、彼は自然の生んだ眞の科學者である。ほんたうに驚異すべき自然の科學者である。

あゝ米國の花バアバングの身の上に、永へに榮光あれ！

文化中心
綴方新教授法終

<p>昭和貳年十月三日 印刷 昭和貳年十一月七日 發行</p>	<p>文化中心 新教授學大系 第八卷 綴方新教授法 定價 金壹圓五拾錢</p>		<p>著作者 峯地光重 發行兼印刷者 辻本經藏 印刷所 東京府下野台町四ノ一五七七番地 流口印刷所</p>	<p>發行所 東京市麹町區富士見町五ノ九 敎育研究會 根營口座東京五八一八〇番・電話九段七二七番</p>
-------------------------------------	---	---	---	--

(本製津大)

文 化 中 心 新 教 授 大 系

體 裁

四六判。上製金泥模様。函入。本文紙數三百乃至四百五十頁。在來の定價にて二圓五十錢以上に相當のもの。

頒布方法

全部十五卷。豫約金を要せず。一冊でも三冊でも自由選擇が出來ます。

刊行期日

昭和二年九月一日より申込順に依り發送ス。六ヶ月以内に全部送達。

價 格

一冊一圓五十錢(送料十二錢)七冊分 金九圓五十錢也
十五冊分 金二十圓也全十五卷申込者へ本立進呈

拂込方法

振替口座東京五八一八〇番又は大阪六八八八〇番を御利用の事。

申込所

東京市麴町區富士見町五丁目九番地

教 育 研 究 會

振替口座東京五八一八〇番
振替口座大阪六八八八〇番
電話九段七二七番

中文 文化中心 新教授學大系 內容目次

東京帝大助教授 入澤宗壽 著

(第一卷) 新教授法原論

- 第一章 教授學及び教授の意義
- 第二章 教授研究の進歩
- 第三章 教授研究の基礎
 - 一、生物學的基礎
 - 二、心理學的基礎
 - 三、論理學的基礎
 - 四、認識論的基礎
 - 五、美學的基礎
 - 六、社會學的基礎
- 第四章 教授の目的及び規範
- 第五章 形式陶冶論
- 第六章 教材價值論
- 第七章 教材配當論
- 第八章 學習過程論
 - 一、發生的考察
 - 二、分析的考察
- 第九章 精神作業論
- 第十章 教授の段階
- 第十一章 教授の様式
- 第十二章 教授の原理
 - 一、自由の原理
 - 二、生活の原理
 - 三、構案の原理
 - 四、作業の原理
 - 五、個性の原理
- 第十三章 教授と情意
- 第十四章 教授と教育
- 第十五章 教授効果の測定
- 附 録
 - 一、教授に於ける時間の經濟
 - 二、自由教育批判
 - 三、教育上の現實性と理想性
 - 四、現今教育思想の哲學的基礎
 - 五、國際教育の思潮

野村芳兵衛著

(第二卷) 修身新教授法

第一、文化

- 一、文化とは何か
思索の態度。文化の正體。自然と價值。
- 二、生命とは何か
生活觀照。生命の個性と普遍性。調和。
- 三、生活と文化
生活の種々相と文化價値の分類。文化價値相互の關係。

第二、愛の道德と宗教

- 一、私の道德生活
道德とは生きる道だ。道德とは愛の反省的創造だ。個性者。淨化。
- 二、私の宗教生活
新道德とは何か
萬人勞働の道德。體驗の道德。

第三、生命信順の教育

- 一、教育のあるべき相
母性愛と教育。友愛と教育。

二、個性教育

個性教育の意義。個性教育の着眼點。個性教育雜感——個性の善惡。生活の二相。個性教育の方法。

三、公民教育
公民教育の意義。公民教育の着眼點。公民教育雜感。

第四、自己をみつめて

- 一、幼時の私
- 二、師範時代の私
- 三、附屬時代の私
- 四、隨感錄

第五、子供をみつめて

- 一、私の見た子供
- 二、子供の本當な育ち
生命の姿。育つと言ふこと。二つの心は矛盾しないか。結び。
- 四、兒童の村一年間

第六、修身教科書の研究

- 一、研究の仕方
- 二、教科書一瞥

第七、修身教育

- 一、はしがき
教授と訓練との綜合。中程か羽織か。

峯地光重著

(第三卷) 國語新教授法 (上卷)

第一章 生活學習とは何か

- 一、生活と文化
文化とは何か——原始人の生活——生活の中心を生命から奪つた物質文明——教育的悲劇——子供生活——與へられたるものの中
の自由——教育の樂園
- 二、生活學習
生活とは何か——自然と價值、存在と當爲——子供の言葉——價值過重の弊——保つ教育——教室を生活室とせよ

新教授法とは何を意味するか。

- 二、修身教育の原則的考察
修身教育の目標。子供の修身學習。
- 三、私の經驗
學校生活による教育の一例
思索による教育の一例
創作による教育の一例

第二章 生活學習と自由解放

- 一、生命と生活
自主的學習——遊戲と作業——生活學習の最高原理——生活學習と生活解放——生活解の意義——自由と創造——脱線——休養——束縛の恐しさ——フロイドの心的外傷
歡喜的學習——遊戲的生活——遊戲と學習
經濟——經驗の結實を目的とする學習——色彩ある生活そのものを目的とする學習——生活解放と保つ教育

二、自由解放と鮮活なる學習
 箱を作る——生活から生るゝ教科——藝術教育——藝術すること——鸚鵡——でんぐり返る——臭いといふ字——國語學習の形式

三、時間割及び教科課程に對する考察
 生活の二相——深化の生活——擴張の生活——從來の時間割——多元的な子供の生活——大人の生活と子供の生活——生活の複雜化と時間割の價值——獨自學習と相互學習と講座——生活生長の順序——教科課程

第三章 生活學習と生命觸發

一、生命の觸れるといふこと
 文化財に觸れること——生命に觸れること——生命發動の相——外的要素と内的要素——觸れることの必要——生活の接觸面

二、環境の多樣化
 美醜善惡——環境多樣——環境整理——圖書室——文集——農園——展覽會——旅行——動物の飼育——相談會

三、生活指導
 生活指導の意味——指導といふこと——日常生活——指導の實際——ごめんね——小

鳥——可愛い兄弟——蠅の目——うんこ

第四章 生活に於ける國語の位置

一、アンドロスの話

二、生活進展の相
 直觀收得の生活——表現の生活——直觀の實例——表現の種々相

三、生活に於ける國語の位置
 直接的收得——間接的收得——收得の生活に於ける聽方讀方の位置——表現の生活に於ける話方綴方の位置

第五章 聽方の生活學習

一、生活の深化擴張と聽方
 原始人の生活の仕方——聽方は生活擴張の先驅——從來の聽方——聽くことの意味——生活目の深化擴張——兒童期の満足——幼年と聽方

二、聽方教育の材料
 童話——童話——地理談——歴史談——理科談——雜誌——生活實話

三、聽方とその處理
 聞き流すこと——感相發表、鬼の草鞋——縮約すること——速記すること

四、話術について

峯地光重著

(第四卷) 國語新教授法 (下卷)

第一篇 低學年の國語生活學習

第一 低學年に於ける國語學習の傾向

一、聽方全盛時代

二、讀方萌芽時代

三、自由話方

四、綴方の萌芽

五、自由なる生活を

第二 聽方資料とその見方

一、學習指導案に對する考察
 指導案の意味——從來の指導案に對する不満——指導案の新しい意味——兒童の豫定案

二、腰折雀の考察
 「腰折雀」——「腰折雀」の考察——實際教授上の注意

三、「國引き」の考察
 「國引き」——「國引き」の研究——「國引き」

の鑑賞と考察——實際教授上の注意

第三 低學年の讀物について

一、讀物とは何か

二、小學國語讀本批判

三、課外讀物について

第四 低學年國語學習の實際

一、假名の學習
 生活要求が第一——片假名の學習——五十音圖——五十音カード——どんちつち——頭だけ——平假名の學習——平假名カード——いろは變へ歌——單語集

二、兒童の本性に立脚せる國語學習
 動物愛好の本能——バツタの學校——繪による國語學習——口頭綴方——動物かるた——童話——英語の遊戲

第二篇 中學年の國語生活學習

第一 中學年に於ける學語學習の傾向

- 一、聽方學習の進歩
- 二、讀方全盛時代へ
- 三、話方學習の傾向
- 四、綴方全盛時代へ

第二 漢字學習について

- 一、國定讀本の漢字提出の狀況と兒童の漢字學習
- 二、兒童の作つた辭書

第三 聽方教材の擴張

- 一、教材の分類に對する考察
- 二、中學年に於ける綴方教材「白鳥の皇子」「うなぎ」

第四 童謡について

- 一、童謡と童心
- 二、童心とは何か
- 三、方言についての考察

第五 童話について

- 一、童話のもつべき内容
- 二、子供の心的發達と童話
- 三、童話「鴨」

第六 中學年國語學習の實際

- 一、聽方話方學習の實際「橘」「日曜の朝」——二人で共作しつゝ、話す——「三人の子供」——繪による話方
- 二、し方難教材の取扱エシブト——推讀推解——題についての研究
- 三、兒童生活劇について生活劇とは何か——天狗二つこ

第三篇 高學年の國語生活學習

第一 高學年に於ける國語學習の傾向

- 一、聽方學習傾向の變化
- 二、讀方全盛時代
- 三、話方學習の傾向
- 四、綴方全盛時代

第二 高學年讀方補充教材について

- 一、高學年讀方義習の傾向と補充教材
- 二、國定讀本の科學的教材「富士山」「音戸が瀬戸」
- 三、新聞を教材とすることについて新聞を教材とすることの意味——新聞の一部を提供するか、全部を提供するか——私

の書いた新聞教材、皇后陛下の御養蠶——少年騎平——マラリヤ病——其他

四、郷土教材について

郷土教材採擇の理由——郷土教材の種類——若松嶺山——退休寺——皆生風景

第三 綴方指導系統案について

- 一、綴方指導系統案の教育的意義
- 二、綴方指導系統案の内容について綴方を兒童の人生科として組織すること——自由の氣分を濃厚にあらはすこと——創作教材と指導教材と——模範文——使用上の便利を考慮すること——使方指導系統案の内容

第四 高學年國語學習の實際

- 一、文集を中心とせる綴方學習文集を中心とする意味——文集「芽生え」——作品「浸水の夜」「柿取り」「冬」其他——文集「こどもの村」——作品「日記」——「私の生活を」「ポルト遊び」其他

二、朗讀會

朗讀會の仕方——朗讀會の實際「僕のこと」——朗讀會の長所

三、考察吟味を主とせる讀方學習學習指導——「新聞」學習の實際

第五 小學校に設備すべき圖書

- 一、修身歴史に關するもの
- 二、理科に關するもの
- 三、地理に關するもの
- 四、辭書に關するもの
- 五、寫眞、地圖、新聞雜誌に關するもの
- 六、雜の部

第四篇 子供の生活記錄

第一 雜 草

第二 追憶の夏

第三 子供の創作

第四 九十九里濱の夏の生活

(第五卷) 算術新教授法

第一章 文化中心算術教育の主眼

第二章 算術教育の文化教育的價值

第一節 科學的價值

第二節 道德的價值

第三節 藝術的價值

第四節 宗教的價值

第三章 文化中心算術教授の規範

第一節 算術教授の目標

第二節 算術教授の理想

第三節 算術教授の生命

第四節 文化生活的擴充

第四章 最近算術教育の思潮

第一節 函數思想の發展

第二節 統一的解法の提唱

第三節 ダルトン、プランの適用と批判

第四節 プロシエクト、メソッドの適用と批判

第五節 自由教育の適用と批判

第六節 教育測定

第五章 兒童の思考發達

第一節 生物學的心理觀

第二節 思考の典型

第三節 思考の構成的態度

第四節 思考の解析的態度

第五節 思考の發生的考察

第六章 數及量觀念の養成

第一節 日本人の量觀念

第二節 數と量とは相異なるか

第三節 算術は數を扱ふか量を扱ふか

第四節 算術教授の革新

第七章 算術教授の本領

第一節 整數加減乗除

第二節 小數加減乗除

第三節 分數加減乗除

第四節 諸等數加減乗除

二、事物問題其の四

三、乘法其の四、其の五

四、乘法其の六

五、乘法其の七

六、暗算一の三

七、乘法其の一、其の二、其の三

第三學期

一、除法其の四

二、除法其の五、其の六

三、除法其の七

四、事物問題其の八

五、事物問題其の九

尋常第四學年

第一學期

一、加法其の一、減法其の一

二、復習其の一

三、乘法其の一

四、除法其の一

五、事物問題其の二

六、復習其の二

七、事物問題其の三

第二學期

一、金 長さ 高さ

二、目 面積 方目

三、目 方目

四、里 程

五、地 積

六、時 間

七、事物問題其の七

第三學期

一、唱へ方書方

二、唱へ方書方

三、加法其の二、減法其の二

四、事物問題其の八

五、乘法其の二

六、除法其の二

七、小數の事物問題

尋常第五學年

第一學期

一、唱へ方書方

二、暗算

三、加法及減法

四、事物問題其の一

五、乘法	三、體積其の二
六、除法	四、リットル
七、事物問題其の二	五、キログラム
八、長さ	六、角 度
九、面積其の一	七、事物問題其の八
十、面積其の一	尋常第六學年
十一、體積其の一	第一學期
十二、目方	一、意義(分數)
十三、復習其の一	二、種類
十四、事物問題其の三	三、倍數約數
十五、事物問題其の三	四、約分
第一學期	五、形を變へること
一、里程	六、加法其の一、減法其の一
二、事物問題其の四	七、通分
三、面積其の二	八、加法其の二、減法其の二
四、地積	九、事物問題其の一
五、時間	十、乘法其の一
六、事物問題其の六	十一、除法其の一
七、ヤード、ガロン、ポンド	十二、乘法其の二
八、事物問題其の七	十三、除法其の二
第三學期	十四、事物問題其の二
一、メートル	十五、小數を分數に直すこと
二、面積其の三	十六、分數を小數に直すこと

十七、事物問題其の三
第二學期
一、比
二、比に關する問題其の一
三、比に關する問題其の二
四、事物問題其の四
五、比に關する問題其の三
六、歩合の意義唱へ方
七、元高、歩合高
八、事物問題其の五
九、損益
十、粗稅

十一、利息
十二、公債、株式
十三、事物問題其の六
第三學期
一、整數小數
二、諸等數
三、事物問題其の九
四、分數
五、事物問題其の十一
六、事物問題其の十二
七、事物問題其の十三
八、事物問題其の十四

菊地勝之助著

(第六卷) 地理新教授法

第一章 時勢の進運と時代の歸嚮	三、東西文明の接觸と國民思想の動搖
第一節 新時代の基調と本邦の世相	第三節 現代國民理想の歸嚮
第二節 時勢の推移と世界の趨勢	第二章 時代の要求と地理教授
一、交通機關の發達と世界列國の接近	第一節 地理教授に對する時勢の要求
二、國家主義と國際關係の緊張	第二節 本邦國勢の理解と其の世界的地位の自覺

第三節 國産奨励の必要と經濟思想の涵養
第四節 海外發展の緊要と植民並に移民思想の培養

第五節 各國々勢及國民性の理解と國際關係の闡明

第六節 日常生活に必要な地理的知識の指導

第七節 國民精神の教養と國際精神の喚起

第三章 現今地理教授の目的觀

第一節 教則の精神から見た地理教授の目的

一、地理科の立場と其の教則

二、現行教則の根本精神

第二節 地理學の本質から見た地理教授の目的

一、地理學發達の概観

二、現今地理學の本質

三、教材としての地理

第三節 時勢の要求から見た地理教授の目的

一、教則の時勢的解釋

二、現今地理教授の使命

第四章 地理教授に於ける自然と文化

第一節 位置の關係と文化生活

第二節 地勢の状態と文化生活

第三節 氣候の影響と文化生活

第四節 産業の變遷と文化生活

第五節 交通の發達と文化生活
第六節 都市の勃興と文化生活
第七節 民族の特質と文化生活

第五章 最近地理學習の進歩と方針

第一節 學習基礎としての郷土地理

第二節 地理を學習する心理過程

第三節 郷土地理の範圍と直觀地理の學習

第四節 想像地理の立場と類推地理の學習

第五節 讀圖力の養成と地理の學習指導

第六節 地理科學習法の指導方針

第六章 地勢教授の着眼と實際

第一節 地勢教授の着眼點

第二節 山脈教材の着眼と其の取扱

第三節 河川教材の着眼と其の取扱

第四節 平野教材の着眼と其の取扱

第五節 湖沼教材の着眼と其の取扱

第六節 海岸教材の着眼と其の取扱

第七章 氣候教授の着眼と實際

第一節 氣候教授の着眼點

第二節 氣候教授上重視すべき教材

一、産業の發達に關係深い氣候

二、交通運輸に影響を及ぼす氣候

三、住民の生活々動を左右する氣候
四、國家の文化に大なる關係ある氣候
五、海外發展に直接關係の多い氣候
六、日常生活に關係の深い氣候

第八章 交通教授の着眼と實際

第一節 交通教授の着眼點

第二節 交通教授上重視すべき教材

一、幹線をなす主要なる交通

二、水陸を連絡する交通

三、重要なる都市港津を結ぶ交通

四、交通の中心又は要路に當る地點

五、交通の特に發達せる地方

六、特に人力を注いで經營した交通

七、最も進歩した交通機關の設備

八、特殊計劃のもとに經營された交通

第九章 産業教授の着眼と實際

第一節 産業教授の着眼點

第二節 産業教授上重視すべき教材

一、國家並に國民生活に關係深い産業

二、郷土並に日常生活に密接な關係ある産業

第十章 都邑教授の着眼と實際

第一節 都邑教授の着眼點

第二節 都邑教授上重視すべき教材

一、國家的世界的の都市

二、地方文化の代表的都市

三、歴史的遺蹟に富む都邑

四、産業の中心としての都邑

五、交通の要路に當る都邑

六、保養遊覽地としての都邑

七、宗教的靈地としての都邑

八、特殊的設備のある都邑

第三節 都邑教材取扱上の主なる着眼

(第七卷) 國史新教授法

第一章 歴史とは何ぞや

歴史は記録ではない—歴史研究の材料—記録の種類—歴史は國民活動の跡—記録の誤謬—史實の観方—歴史は科學であるか

第二章 歴史教授の任務

一、國定の國史教科書
國史教科書の權威—國家の解釋する歴史着色されたる教科書—史學と國定小學國史との異同—歴史の教材とは何か
二、小學國史編纂の方針
編纂の理論と其の適用—知的教育—道德教育—國體觀念の養成—結論
三、國史教授の任務
國史教授も亦教育の一部面—理知か情意か—知る事なくして情意が練れるか
四、情味ある教授

第三章 國民たる志操とは何か

一、日本歴史の特色

文化は自然對人の問題—國定小學國史の特色

二、國民たる志操とは何か
國民性と國民志操

第四章 現代思潮と國民性の改造

一、更改すべき國民志操
二、忠君愛國の念はいかに改造すべきか
忠義とは何か—忠義は軍人の專賣ではない
三、秀吉の朝鮮征伐

第五章 國際主義の教育と國史教授

一、極端なる國家主義の潰滅
國際主義の教育
二、敵愾心と歴史教授
對外關係と侵略思想—秀吉の外征と攘夷論

第六章 國民の發展と國史教授

一、人類の理想

我民族の理想

二、侵略主義の没落

未來の歴史男界性的徳の修練—發展的教材の一瞥—偉大性の教育

第七章 學習の本義

一、學習の意義
研究とは何か—學習の要素
二、學習の一般形式
學習の過程と人生の過程—學習の段階
三、歴史教授と自學の問題
自學の意義—自覺的なること—心意活動を伴ふこと—情的教材の自學—一般形式と自學
四、プロセクト、メソッドと歴史の學習

第八章 國史學習の一般順序

一、學習前部
問題の發見—自由教育と歴史教授—問題解決の工夫—解決に向つての努力
二、學習本部
研究結果の表現—新問題の發見—新問題の解説
三、歴史教授と話術
高潮したき歴史教授—力説したき情味教育—温情たつぷりな教授—先づ話術を研究せよ—

如何にして話術を研究すべきか—教材の吟味—表現の仕方—問の發し方とボースの置き方—解決法の適用

四、學習後部

五、教材の分類と方法の適用
情的教材と知的教材—分類の標準—知的教材の取扱知解より情意へ—情意より知解へ

第九章 歴史科學習態度の馴致

一、學習態度馴致の基礎
自主的なること—繼續的なること
二、學習の方便物
教科書—歴史辭典—歴史的兒童讀物—歴史參考書—圖書館—繪畫—地圖—年代表—遺物模型
三、問題構成の指導
吾等の理想とする學習態度—人物を主としたる場合—或る行爲を中心とした場合—事件を中心とする場合—文化を中心として研究する場合

四、學習態度馴致の外的基礎
聞き方—語り方—読み方—書き方—行ひ方

第十章 教授の實際例

一、情的教材取扱の實際例

峯 地 光 重 著

(第八卷) 綴方新教授法

- 第十一章 編纂者の意見に依る小學國史の活用**
- 一、編纂方針と取扱上の注意
 - 二、知的教材の取扱の實例
- 第一學期 學習前部
第二學期 學習本部
第三學期 學習後部
- 第一學期 學習前部
第二學期 學習本部
第三學期 學習後部

- 第十二章 明日歴史教育**
- 教材選擇—叙述の仕方—歴史と修身—愛國心の問題
- 一、教科書の解剖
 - 二、知的方面—挿繪の説明—情意方面の解剖
 - 三、文化史的にみた尋常小學國史挿繪を通して—記事中に表はれた文化的事實附歴史趣味の養成

第一章 綴方と云ふ觀念の範圍

- 一、純粹な要求
△魂で書く △綴方とは何か △内的要求と外的要求 △多作の弊害
- 二、綴方は兒童の「人生科」である
△兒童の精神生活と自然的生活 △兒童の文

第二章 新しい綴方教授の指標

- 化生活 △「附」方言の問題
- 一、伸びて行くこと
△草木のやうに △活通し △魂の食物 △吃驚すること △無限なるもの、自己實現
 - 二、知識と智慧

第三章 綴方教授の輪廓

- △知識と智慧 △ミレーのアンセラヌ △その人を美しくする △一つのエピソード
- 一、三つの道
 - 二、正しき文章觀
△純粹 △眞實 △個性 △「生死」と「犬の出生」 △生命の讀本
 - 三、生活指導といふこと
△経験の意味 △生活指導の二方面 △教師の生活の示現
 - 四、綴方教授の系統化
△細目不要論とその批評 △新しき綴方教授細目の使命

第四章 綴方の教材に關する私の考

- 一、教材の意義
- 二、綴方教授の目的と教材
△創作教材とその内容 △基本的指導教材と附帶的指導教材
- 三、基本的指導教材と其の内容
△観たまゝを書くこと—自然を眞に見る △感じを抒へること—花は心の中で咲き心は花となつて咲く △日記を書くこと—日常生活の深化 △書翰を書くこと—他人を

第五章 新しい綴方の學習法

- 尊敬することは自己を尊敬すること △時間の順序に述べること—文化の發展は時の流れに來る △事物のわけを説き明すこと—人間と自然とのもつ魂 △考を述べること—「考へる」と云ふことは積極的
- 一、附帶的指導教材と其の内容
△物を観ること—客觀と主觀の燃焼 △特色を捉へること—感じから來る想と考へから來る想 △文の組立文の段落—自然は形を組立て、表現の方法を教へる △文の調子—比喩 △推敲—フロウベルの一事一言 △草稿標準と推敲標準
 - 二、創作教材と指導教材との調和交渉
- 第五章 新しい綴方の學習法**
- 一、學習法の一般的考察
△收得的學習と發表的學習 △創作的學習と輔導的學習
 - 二、創作的學習
△一般的順序 △思想の練熟といふこと △作品を味ふこと △全力を盡すことによつて全力は發達する △無言の相互研究 △自由作と生活指導
 - 三、指導的學習

△一般的順序 △指導と干渉との限界の一線
 △範文による指導 △導の實際例 (1) 理解を主とする指導の實例(我が崇敬する人)
 (2) 感情を主とする指導の實例(童話) (3) 自然を材料とする指導の實例(冬から春へ)
 △課題の真意義 △眞の自由 △記述中の證據 △推敲に關する文話 △推敲の相互學習
 △短句の推敲 △推敲の獨自學習 △簿上訂正の弊害 △處理(1) 分析的研究 (2) 批評鑑賞 △文の立方の指導 △批評鑑賞に關する實地教授 △綴方學習の要點 △終りに

水 木 梢 著

(第九卷) 理科新教授法

第一章 文化中心生活觀の眞髓

自然の轉變 宇宙の宏大 宇宙の神秘 自然の傑作 人生の目的 人生の歸趨 自然科學の期待 文化中心理科教授の眞髓 自然と文化

第二章 理科教授の文化生活觀

第一節 生物界と文化生活

る實地教授 △綴方學習の要點 △終りに
 第六章 著者の小品
 一、野菜の芽
 二、日常生活
 三、新米
 四、恐ろしい「モリ」の話
 五、我が發表は我が生命の飛躍である
 六、研究教授の後
 七、作物改良王ルーサー、バアベング

一、弱肉強食の自然界 強敵環視の生活 生物の生存競争 同族相食む 一時的結合 自然界の優勝者 人類祖先の奮戦 知能の發達 人生の競争 生物界の大王 生活難の饑來
 二、適者生存の教訓 生物界の均勢 逃避 再生力 威嚇 保護色 擬態 警戒色 欺死 人類界への示唆

第二節 理化教授

一、物理教材の理法教授の場合 兒童心理に從ふ 明瞭に理解せしめよ 連續的實驗 觀察の整理 考察問題の提示 考察の整理 應用問題の提示
 二、化學教材の性質吟味教授の場合 觀察の段階 簡潔に進め 連續實驗 觀察整理 考察應用 教授 終結
 三、人類の勤勞教材の場合 先入の發明を語る 發明者の態度 創作獎勵 工夫製作
 第三節 生理衛生教授
 一、營養器教材の教授の場合 何故消化器は長いか 食物消化の分擔 齒の形態 齒の衛生 義齒 消化吸収 要領
 二、五感器教材の教授の場合 感覺器は受活器である 感覺器の保護 要領
 三、食料教材の教授の場合 體力の根源 營養カロリー 等力的代償の法則 蛋白質攝

收最少値 動物性食品と植物性食品との比較 肉類の比較 要領
 第四節 天文地文教授
 一、天文教材の教授の場合 兒童の生活 知識の萌芽 繼續的觀察 北極星 日蝕と月蝕
 二、地文教材の教授の場合 生活興味 地文との交渉 想像の基礎 水 川 風

第十一章 理科學習の理論と實際

第一節 理科學習書の必要 時代の要求 教育的活動
 第二節 理科學習書の條件 豫習上 學習上 復習上
 第三節 理科學習書の體裁 豫習欄の活用 學習欄の活用 整習欄の活用 挿畫の彩色 教授備考
 第四節 理科學習書の實例 植物教材 動物教材 理化教材

石 澤 吉 磨 著

(第十卷) 家事新教授法

第一章 文化生活觀と家事教授

第一節 文化生活の倫理的考察

文化生活と人格價値の實現—人格と物質との區別—人格と自我との關係—人格は個體なり—人格と性格とは異なる—人格主義的文化生活觀

第二節 文化生活より見たる人格主義と物質主義

人格主義と物質との交渉—人格主義より見たる物質の價値—目的と條件との區別—人格主義表現の二様の態度—人格主義生活に對せる家事の位置

第二章 婦人に對する近世の社會的要求

第一節 婦人に對する早期時代の要求

家庭に於ける婦人の生活—社會に於ける婦人の生活—女性としての女子教育

第二節 婦人に對する社會的要求

家庭活動の變化—婦人の活動範圍の社會的擴張—社會化する近世的家庭

第三節 婦人に對する現代的要求

主婦としての要求—公人としての要求—收入者としての要求

第三章 社會的要求に對する家事科の發達

發達

第一節 過去に於ける學校の家事

早期に於ける學校の家事—家事の發達に對する自然科學者の貢獻—家事の發達に貢獻せる高等教育—家事の發達を助長せる他の施設

第二節 現時に於ける學校の家事

小學校に於ける家事—女學校に於ける家事—職業教育の學校に於ける家事

第三節 將來に於ける學校の家事

現代の要求が將來に及ぼす影響—物質消費者としての主婦の教育—金錢收入者としての主婦の教育

第四章 家事教授要旨の教育的考察

第一節 家事の對象

家事の定義—家庭生活の意義—家事の對象—家事科の範圍—家事と家事科

第二節 家事教授の效果

効果の二方面—實質陶冶主義—形式陶冶主義—兩主義の調和

第三節 家事教授の要旨

教則に示されたる要旨—要旨の解釋—知的方

第五章 家事教材の選擇と排列

第一節 教材選擇の基礎要件

教材選擇の必要—生活の必須上より—理解の適合上より—興味の喚起上より—地方の要求上より—現代の要求より—教授時間の制限上より

第二節 選擇されたる家事教材の實際

高等小學校に於ける家事教材—高等女學校に於ける家事教材—家事教材内容の斟酌

第三節 教材排列の基礎的要件

教材排列に關する要件三方面—心理的要件—論理的要件—對他の要件

第四節 排列されたる家事教材の實際

教材排列の二様式—高等小學校家事教材の排列—高等女學校家事教材の排列

第六章 家事教材の學術的研究

第一節 家事教材の自然科學的研究

自然科學研究法の本領—理論的方面の研究—實驗的方面の研究—實習的方面の研究—産業的方面の研究

第二節 生活改善資料の研究

改善資料研究の必要—住居の改善資料—衣服

面—技術的方面—能力的方面—要旨の歸結

第七章 家事科と他教科との關係

第一節 家事科と理科との關係

理科の本領—基礎的知識と應用的知識—歸納的態度と應用的態度

第二節 家事科と數學科との關係

家事の經濟的基調—經濟術と數學—自家主上の經濟と社會的經濟

第三節 家事科と修身科との關係

家事の二方面—精神的奉仕と修身—物質的奉仕と修身—子女の教養—家人の修養

第四節 家事科と其の他の教科との關係

一家對市町村自治體關係—一家對國家關係—一家對國世界關係

第八章 家事科學習の根本的態度

第一節 學習の基礎的考察

學習の意義—學習の四作用—學習の態度—學習の動機—學習の法式—學習の順序

第三節 家事教材主眼點の研究

主眼點把握の必要—教材の種露と主眼點の相違—住居の一例—衣服の一例—食物の一例—主眼點の把握と教材に關する知識

第七章 家事科と他教科との關係

第一節 家事科と理科との關係

理科の本領—基礎的知識と應用的知識—歸納的態度と應用的態度

第二節 家事科と數學科との關係

家事の經濟的基調—經濟術と數學—自家主上の經濟と社會的經濟

第三節 家事科と修身科との關係

家事の二方面—精神的奉仕と修身—物質的奉仕と修身—子女の教養—家人の修養

第四節 家事科と其の他の教科との關係

一家對市町村自治體關係—一家對國家關係—一家對國世界關係

第一節 普通教授
 準備—揭示—整理
 第二節 實習教授
 準備—揭示—整理
 第三節 家事教授案の實例
 普通教授の實例—實習教授の實例—指導案—
 實習案

第十三章 家事教科書の性質及び選定
 第一節 家事教科書の性質
 教科論上より見たる教科書—方便論上より見
 たる教科書—教科書
 第二節 家事教科書の具備すべき要件

山崎博著

(第十一卷) 體操新教授法

第一編 體育本質論
 第一章 體育運動の意義
 第二章 教育の本質的要素としての體
 育覽

要件の概観—豫習上より見たる要件—本習上
 より見たる要件—復習上より見たる要件—家
 事教科書の改良—現行家事教科書の使用法
 第三節 家事教科書の選定
 主要條件—參考要件

第十四章 家事教室の設備及び解放
 第一節 家事教室の設備
 設備の必要—普通教室—實習教室—教具標本
 室—研究準備室
 第二節 家事教室の解放
 解放の必要—普通教室—實習教室—教具標本
 室

第一節 歴史的見解
 第二節 生理的見解
 第三節 倫理的見解
 第四節 哲學的見解
 第五節 教育學的見解

第三章 プロジエクトメツドの内容的
 意義
 第一節 基礎的起源
 第二節 發達概説
 第四章 プロジエクトメツドの原理
 第五章 プロジエクトメツドによる
 體育運動

第二編 發育體操論
 第一章 體操の改造主張
 第一節 形式本位の體操教授
 第二節 技術本位の體操教授
 第三節 然自覺體操
 第二章 現今體操教授の内容的概観
 第一節 解剖生理體操……瑜典體操
 第二節 精神振興體操……獨逸體操
 第三節 合理的體操
 第三章 發育體操の主張
 第一節 兒童生活の意義
 第二節 學校教育即學校生活即兒童生活の意義
 第三節 發育體操主張の立場
 第四節 發育體操の内容的根柢としての生理解

剖的生命と心理的生
 命
 第一項 生理解剖生命
 第二項 必理的生理

第四章 發育體操
 第五章 發育體操の内容一斑
 第六章 運動實施上の要件

第三編 發育の爲めの遊戯競技論
 第一章 遊戯競技の意義
 第二章 遊戯競技尊重の主張
 第三章 遊戯競技教授上の諸要件
 第四章 教材選擇配列論
 一、遊戯教材の選擇配當表
 二、競技教材の選擇配當表
 三、散步競走に關する規定及標準
 四、體操科教授時間中に於ける體操教練遊戯

第四編 兒童運動會の構成論
 第一章 從來の運動會に對する改造要
 點
 第二章 運動會の眞使命
 第三章 兒童運動會構成の實際

第一項 大正十年度運動會の構成

第二項 大正十一年度運動會の構成

第四章 プログラム並運動種目の内容的説明

第五章 賞品問題

第六章 標準走程の研究

第七章 豫算作製研究

第八章 役割研究

第九章 各自レコード及レコード別組合

第十章 審判及審判規程

第十一章 設計及規定

第十二章 運動會後の整理

第五編 兒童遠足會の構成論

第一章 從來行はれかる遠足の内容的意義觀

第一節 從來解せられた内容的意義觀

第二節 遠足と校外教授

第三節 遠足と修養旅行

第二編 都市教育に於ける遠足の地位

第一節 身體的方面

第二節 精神的方面

第三節 野外の價值

第三章 遠足革新論

第一節 舊きを貴く諸相

第二節 革新すべき諸相とプロジェクトメソツ

第四章 兒童遠足會の實際

第一節 大正十年十月遠足會の構成

第二節 大正十年十月遠足會の構成

第三節 教師の研究

第四節 地踏査研究

第五節 遠足細目の調製

第六節 準備事項

第七節 實地中の法意

第八節 處理の實際

第一章 目的論

第二章 實際論

一、經費

二、場所

三、作業

四、兒童研究日程の作業と處理

東京視學官 田村虎藏序 小 出 浩 平 著

(第十二卷) 唱歌新教授法

閑却されてゐた音樂教育も漸く最近眞剣に考究されてきた。然しまだ眞に文化的な教授實際上の著述を見出す事が出来ない。此の際唱歌教授に多年の實際研究を積み、教育界にもその功績著しい小出先生の懇切なる實際書の刊行された事は我が教育界の大なる喜びであらねばならぬ。

第一章 唱歌教授の目的

第二章 子供の生活と音樂

第三章 教材の研究

第四章 基本練習の研究

第五章 樂譜教授の研究

第六章 聲音發治の研究

第七章 歌ひ方教授の研究

第八章 鑑賞教授の研究

第九章 童謡唱歌の作曲法

第十章 兒童作曲指導の研究

第十一章 難聽兒童の取扱研究

第十二章 私の唱歌教授の一時間

第十三章 残された問題の研究

稻森縫之助 著

(第十三卷) 圖畫手工新教授法

第一章 圖畫手工教育の新展開

第一節 美を理想とする成形への教育

第二節 美を理想とする創造の教育

第三節 教育的意味の轉廻

第四節 創造發展としての創造分化

第二章 圖畫教育の新組織と其實際

第一節 觀念畫の藝術的意味及其指導

第二節 圖案模様の新指導

第一項 模様の發生と藝術的本質

第二項 圖案模様の教育

第三節 寫生畫の指導

第三章 手工教育の新組織と其實際

第一節 彫刻教材

第二節 工藝教材

第三節 建築教材

第四節 生活手工教材

第五節 木工教材

第四章 鑑賞教育の實際

(第十四卷) 各科教授實際案

第一章 序想

第二章 文化と生活と體驗

第三章 兒童の生活姿態

第四章 生活材即教化材

第五章 生活指導の方法

第六章 生活指導の組織及系統

第七章 道德的生活の指導

第八章 科學的生活の指導

第九章 藝術的生活の指導

第十章 宗教的生活の指導

第十一章 經濟的生活の指導

第十二章 社會的生活の指導

第十三章 結語

東京帝大助教授 入澤宗壽 著

(第十五卷) 文化教育學と文化科教授法

第一篇 文化教育學

第一節 文化教育學とは何ぞや

第二節	文化教育學と國民生活
第三節	文化教育學と兒童心理
第四節	體驗の哲學と教育
第五節	教育と體驗
第六節	スプランガーの教育學說
第七節	教育者の精神
第八節	人格的教育學と文化的教育學
第二篇 新教育の傾向	
第一節	新教育の傾向と其批難に就いて
第二節	新教育運動の方向
第三節	新教育の原理と適用
第四節	フランスに於ける新教育運動
第五節	新教育の傾向を論ず
第六節	新教育の中心概念
第七節	自己活動の原理と適用
第八節	國民教育の新方法
第三篇 新教育の問題	
第一節	現代教育の諸形相
第二節	現下の公民教育問題
第三節	國民意識の教養
第四節	國民の精神教育
第五節	國際的國民教育の提唱
第六節	教育改造の根本問題

第四篇 文化科教授の基礎	
第一節	文化哲學と文化教育學
第二節	文化と生活と教育
第三節	自然と理想と文化
第四節	文化教育學の趨勢
第五節	構造の概念と文化
第六節	體驗の概念と文化
第七節	體驗と文化價值
第八節	體驗教育と國民文化科
第五篇 文化科教授の方法	
第一節	文化體驗の教育と作業原理
第二節	自己活動と價值活動
第三節	文化學校の主張
第四節	文化科の思潮
第五節	文化科の内容
第六節	文化科の方法
第七節	歴史教育の本質と文化科
第八節	日本文化科の教授
以上	

259
99



